

# 劇場調査中間報告書

調査担当者 安藤隆之  
栗倉宏子  
酒井正志

文化科学研究所演劇研究グループは、1987年度から名古屋圏の劇場調査を開始した。初年度は各種雑誌、関連資料によるデータ収集に終始したが、1988年度からインタビューと劇場の实地調査に入った。調査範囲は東海三県に跨るが、中間報告を作り、今後の調査のため反省と見直しをすることになった。

私たちは第2章に示されている7分野41種類の調査項目を立て、1988年の夏から冬にかけて25カ所の劇場を調査した。

各劇場の調査結果は第3章において第1章に示されるレファレンス番号順に展開される。なお第4章には各調査者の調査概要とコメントがある。

## 第1章 調査劇場リストとレファレンス番号

001	愛知県文化講堂	(AN)
002	愛知県中小企業センター	(S)
003	愛知厚生年金会館ホール	(AW)
004	愛知県勤労会館	(AN)
005	アトリエ「ゼロ」	(AN)
006	長円寺会館：ホール「サンギータ」	(AW)
007	中電ホール	(AW)
008	電気文化会館コンサートホール	(AW)
009	ふなきスタジオ	(S)
010	劇団PH-7アトリエ	(AN)
011	東別院青少年会館ホール	(AN)
012	平針小劇場（名芸アトリエ）	(AN)
013	今池ガスホール	(AW)
014	猪小石創造文化会館（うりんこ劇場）	(S)

015	名古屋港湾会館	(S)
016	名古屋市芸術創造センター	(AN、AW、S)
017	名古屋市公会堂	(S)
018	名古屋市民会館	(AW)
019	七ツ寺共同スタジオ	(AN)
020	誓願寺	(AN)
021	スタジオ・ルンデ	(AW)
022	スタジオ高針(現 テアトル西友)	(AN)
023	スタジオ・座・ウイークエンド	(AN)
024	鈴蘭南座	(S)
025	滝創六ロイヤルマイム劇場	(S)

※劇場名は、和名をローマ字綴りにしてアルファベット順に並べた。

ただし劇場名が外来語の場合、原綴りをもとに並べた。

※略号(AN、AW、S)は各々調査担当者の安藤隆之、栗倉宏子、酒井正志を意味している。

## 第2章 調査項目並びに説明

### (1) 調査項目

- 01 名称
- 02-1 所在地
- 02-2 電話
- 03-1 劇場設立趣旨(主体的意向)
- 03-2 設立後の経過と問題点
- 03-3 今後の抱負
- 04 経営形態
- 05 (劇場形態)
  - 05-1 外部写真
  - 05-2 設計者及び施工会社
  - 05-3 図面のレファレンス番号
  - 05-4 (設備の水準)
    - a (照明)
      - a1 回線数(リムパックのキャパシティ)
      - a2 照明の種類と個数

- a3 その他の特色（映写設備など）
- b（音響）
  - b1 音響設備
  - b2 音響効果
- c（舞台形態）
  - c1 固定型、自由移動型、その他
  - c2 舞台の広さ
  - c3 舞台の高さ
  - c4 袖の広さ
- d（舞台の機械的設備）
  - d1 回り舞台の有無
  - d2 セリの昇降の有無
  - d3 特殊な機械設備
  - d4 奈 落
  - d5 楽 屋
  - d6 花 道
  - d7 その他の設備：シャワー室、稽古場（リハーサル室）など
- e（客席）
  - e1 客席数 minimum-maximum
  - e2 客席の形態：ワンスロープ型、階上席あり、フラットフロア  
その他
- f その他の特色
- g 使用料金

06 （劇場の歴史）

- 06-1 建 築 年
- 06-2 改 築 年
- 06-3 劇場建築場所の変化
- 06-4 経営者の変化
- 06-5 そ の 他

07 （上演史関係）

- 07-1 上演史：（年）（劇団名）（作品名）（演出）など
- 07-2 主体的に呼んだ劇団、主体的に取り組んだ企画。
- 07-3 利用者（劇団）の傾向
- 07-4 記憶に残る上演
- 07-5 その他。情報を提供する資料など。

## (2) 項目に関する説明

私たちは上記の調査項目を立てたが、これは暫定的なものに過ぎない。参考とするこうした調査がないばかりか、どの点をどのような角度から調査するかについて検討を重ねながらの作業であるから変更もありうる。例えば(04)の経営形態は、法律的な区別だけでなく、財政的規模との関係も検討しうる。(05)の劇場形態についてはこれ以外に項目があるであろう。私たちは建築や音響の専門家ではない。演劇及び音楽ライブを創る側からの要請や希望を中心に選んでいる。技術者側と舞台人側の関係は十分検討すべき問題であるが、それは避けた。とって舞台人側に充分立っているかということ、そうでもない。例えば舞台の高さはいわゆるタッパだけが大切なのではなく、とぼしが入る有効空間も考えるべきであろう。楽屋の問題も軽視できないが、最初の調査項目からは外れていた。現地調査をしてその重要性を痛感したのであった。照明は最近目ざましく進歩した分野であるが、大劇場での設備はきわめて高度なものになっており、照明のスタッフや舞台監督はプログラマーの知識が必要である。また音響効果にしても残響や反響板などについて専門的知識がなければ調査のしようがない場面もあり、私たちの現在の力では綿密な調査は出来ないのが現状である。

他方、私たちが報告の題目として使用している「劇場」の概念もはっきりしている訳ではない。基本コンセプトとしては広くパフォーマンス・スペースを考え、商業劇場のようなホールだけを考えてはいない。とって野球場までも考えてはいない。芸術的表現中心であり、それを観賞するためにお金を払って上演空間に席を求める観客の存在があることが条件だ。しかしそのカテゴリー概念や適用制限も曖昧であり調査を通して検討を重ねる必要がある。またそれが一つの調査目的でもある。

以上のような状況の中で一年間の調査を報告するのだが、調査件数が少ないこともあって生の資料中心の中間報告であることをお断りする。今後の調査のファーストステップというのが私たちの位置づけである。

項目中、写真や図面が(有)とされているものは、レファレンス番号が以下のように自動的に付けられている。その他の出版物など参考資料も同様である。

no (三桁の番号 + 調査項目の番号)

劇場レファレンス番号 各劇場ごとの調査項目

例: 資料ナンバー No (004-05-3)

最初の数字は劇場レファレンス番号 [004]、つまり愛知勤労会館ホールに関係しているを示している。そして次の05は、各劇場の調査項目の「劇場形態」の項目を意味している。さらに3は、劇場の図面に関わる調査項目を意味している。

なお、調査対象により掲載不要と思われる項目は、その都度省略してある。例えば、音楽関係の劇場は基本的に貸ホールとしての営業が主体であったため、07-1上演史の項目は記載されていない。その営業内容は07-2以下の項目に見ることができる。

また、未調査である項目、あるいは調査しても不明である項目には不明と記載した。

調査資料の整理方法ははまだ決定されていないが、収集された資料は当分の間劇場ごとに一括して

整理収納されているので、最初の番号を頼りに収納ボックスを探せばその中に求める資料は保存されている。なお資料は名古屋学舎の文化科学研究所にある。

### 第3章 調査結果

[001]

01 愛知県文化講堂

02-1 〒461 名古屋市東区東桜1-12-1

02-2 (052) 971-5511～5

03-1 (以下「愛知文化会館20年のあゆみ」を参考に記述する。)

戦後の文化興隆の機運と共に、各種の文化団体やサークルなどの結成が相次ぎ、文化活動が活発になったが、会場となるべき施設は乏しかった。名古屋は東西の文化交流の場でありながら、東京と京都、大阪の中間に位置する単なる通過都市にすぎず、新聞社などで文化的な記念行事が行われる場合においても、東京から名古屋を素通りして京都に会場を求めていた。このような状況下において、桑原幹根知事は26年5月に就任以来、知事選挙で公約した「大愛知の建設」の視点から、県の施設を子細に検討し、文化的な施設がきわめて貧弱であることを痛感していた。27年は、希望に満ちた独立をふたたびわが国にもたらした講和条約発効の年であった。このときこそ千載一遇の機会であり、その記念塔を打ち立てるために各方面の衆知を集め、講和記念にふさわしい文化センターを建設して、県民の生活文化を向上する原動力にしようということになった。それだけに講和記念として文化センターの建設は、最も有意義な事業であった。

建設に際しての構想は、(1)図書館法による県立図書館の設置、(2)絵画、陶芸、商業美術などの美術家、美術団体が多数あるこの地方に、常設の展覧会場をもった美術館の創設、(3)婦人と青少年に社会教育を実施するための集会場の開設という、これらの懸案を一括総合して、県民のための文化の殿堂、あるいはオアシスとしての機能を発揮するとともに、中部地方一帯の文化センターの役割を果たす施設の建設を目指していた。(1-2頁)

昭和27年4月25日に講和記念事業文化施設基本計画樹立委員会が開催され、桑原知事から文化センター建設案の概要に着いて説明が行われた。そして、文化センターの建設にあたっては、(1)図書館、美術館、教養施設の3部門が分離独立しないで融合一体となった独自の総合文化施設でなければならない、(2)県民全般に対する文化振興の原動力とするために、移動性と融通性のある活動力を備えなければならない。したがって事業企画、管理運営には慎重な配慮を要するが、施設の建設も、文化の殿堂として将来を見通した、近代的な品位のあるものでなければならないと考えられた。そこで知事公室企画課を中心に、広報課、土木部計画課、建築部営繕課、教育委員会事務局社会教育課、文化課があい寄り、

た尺度に基づく分析と検討を行なった。

保健科 保健科の37項目については、固有値1.0以上で3因子が抽出された。第1因子は「指導内容の工夫」、第2因子は「保健科への批判」、第3因子は「保健科の有用性」と命名した。

次に、この結果から3つの尺度を構成するにあたっては、因子負荷量が.35以上のもので、内容的に不整合のないものを採用した。各尺度の信頼性係数は、第1尺度が9項目からなり.782、第2尺度も9項目からなり.767、第3尺度は6項目で.783と高く、信頼性は高い。表7にその内訳を因子負荷量とあわせて示す。

表7 「保健科」関連項目の因子分析結果

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	共通性
H 7. 私は高齢者の健康についての解説をしている。	0.66648	- 0.03217	0.02987	0.446117
H 31. 私は医療制度についての指導を生徒にしている。	0.55351	0.04252	0.04262	0.309997
H 24. 私は生徒に保健増進に役立つ情報の集め方を教えている。	0.55090	- 0.07378	0.27998	0.387325
H 33. 私は保健の授業で健康食品について取り上げる。	0.55012	0.10709	0.14173	0.334186
H 4. 私は健康的な美とは何かについて保健の授業の中で話すことがある。	0.50936	0.11510	0.24147	0.331008
H 6. 私は職業と健康の関係についての解説をしている。	0.45232	- 0.13522	0.04378	0.224799
H 19. 私は保健増進に役立つ情報は努めて生徒に知らせている。	0.44752	0.07301	0.31472	0.304653
H 18. 私は健康保持のための運動を実際に生徒に指導している。	0.41491	0.00852	0.28784	0.255072
H 36. 私は健康と美とは結びつくものとして教える。	0.35651	0.15301	0.21998	0.198902
H 14. 私が今使っている教科書では保健で形成すべき学力と何かが不明瞭である。	0.07744	0.68739	0.05700	0.481752
H 13. 私が今使っている教科書は保健と社会との関わりについての内容が不足している。	0.13842	0.65352	0.06474	0.450441
H 15. 保健の授業では生徒が自分の心理と身体との関わりを考える機会がない。	0.06372	0.60481	- 0.15218	0.393017
H 35. 私が今使っている教科書は保健を前向きに考える態度を生徒の中に形成させようとしていない。	- 0.04391	0.53364	- 0.02739	0.287445
H 12. 保健の授業では生徒が自分の身体と保健の内容を具体的に照らし合わせる機会がない。	- 0.05969	0.50644	0.01247	0.260202
H 9. 私が今使っている教科書は保健と政治との関わりについての内容が不足している。	0.17031	0.46601	0.04385	0.248092
H 21. 私が今使っている教科書は心理学的な内容が不足している。	0.08510	0.40420	0.04568	0.172709
H 34. 保健の指導法の研究は停滞している。	0.00236	0.36769	- 0.01539	0.135438
H 11. 私が今使っている教科書は保健の学習に必要な内容を十分含んでいる。	0.19438	- 0.38942	0.05994	0.193026
H 32. 保健の授業は生涯にわたる健康への態度作りに役立つ。	0.16041	- 0.16318	0.71184	0.559077
H 26. 保健の授業は生徒の健康増進に役立つ。	0.16944	- 0.21155	0.70866	0.575665
H 27. 保健の授業は健全な健康観の形成に役立つ。	0.19907	- 0.28592	0.66281	0.560694
H 1. 保健の授業は健全な身体観の形成に役立つ。	0.14036	- 0.10806	0.63391	0.433216
H 2. 保健の授業は身体の個人差に気づかせるという機会となる。	0.08350	0.12342	0.43586	0.212176
H 8. 保健の授業は生徒の自己理解に役立っている。	0.10296	- 0.13656	0.41140	0.198497
H 3. 私が今使っている教科書の内容は生徒にとって難しい。	- 0.03919	0.27490	- 0.6363	0.081154
H 5. 健全な精神は健全な肉体に宿るという考えは保健の基礎となる考えの1つだ。	0.21312	0.02921	0.15067	0.068973
H 10. 私は健康保持のための運動をするよう生徒に勤めている。	0.22973	- 0.08596	0.12582	0.075993
H 16. 私は保健の授業では最近の健康ブームは批判的に扱う。	0.25169	0.20120	- 0.07372	0.109265
H 17. 健康と環境問題は深く関わっている。	0.04840	0.06095	0.14711	0.027700
H 20. 生徒にとって自分の身体をよく知るといことは大切なことだ。	0.01645	- 0.01460	0.18011	0.032923
H 22. 人間の身体は基本的に同じだという考えを持たせる必要がある。	0.25810	0.16178	0.17599	0.123761
H 23. 保健の指導に自信を持っている教師が多い。	0.35510	- 0.32407	0.17631	0.262205
H 25. 保健の授業では教育内容、方法で男女を分ける必要はない。	0.20939	- 0.05580	0.05318	0.049787
H 28. 化粧、服装などは身体に関する意識を高める。	0.21147	0.07311	0.26539	0.120500
H 29. 保健教材に関する知識を十分に持っている教師が多い。	0.32756	- 0.30971	0.18777	0.238472
H 30. 保健の授業は教材の内容の習得が中心となっている。	0.15560	0.12524	- 0.05697	0.043142
H 37. 私は身体の訓練は健康に結びつくものとして教える。	0.22923	0.12678	0.23628	0.124452
	3.191359	3.148379	2.972095	

の選抜と9回の投票を繰り返して入選各等が決定した。(一等 小坂秀雄 東京都杉並区、二等 小宮山雅夫 東京都北多摩郡、三等 吉成武 東京都中央区：大成建設設計課、同佐久間達二 名古屋市昭和区)

審査員はつぎの各氏であった。

<美術> 太田三郎、川島理一郎

<建築> 今井兼次、岸田日出刀、城戸久、佐藤四郎、堀口捨巳、村野藤吾、森田慶

—

<その他> 田淵寿郎、浜島敏雄(7頁)

一等当選の審査表はつぎのとおりであった。

<一等当選> 美術館、図書館、大講堂、婦人青少年教養場という用途の異なった大きな建物を有機的にうまく総合按配し、採光とか交通とかの問題は言うまでもなく、冷暖房とか空気調整とかいろいろな設備の面にまで親切によく考慮されて、新しい日本の感覚というものがどこともなくにじみ出ているまことに得難い好設計で、審査員のほとんどが全部一致して推薦したのもけだし当然なことである。

また、この一等入選作品に決定した小坂秀雄氏は、とくに美術館関係の設計については平面計画として、(1)100メートル道路または40メートル道路に面し、はいり易くした。(2)展示室はなるべく同一階として使用上および採光上便ならしめ、中央広間のシステムにより二つ以上の大小展示が同時に自由自在に分離して開催しうるようにした。(3)展示室の将来拡張によって機能、外観が損なわれないようにあらかじめ計画がしてある、と説明している。

昭和30年15日に美術館が完成し、引続き講堂の建設が設計された。よく31年、9月定例県議会において2億7,491万円の建築費が可決され、かねてからの懸案であった講堂の建設構想が、いよいよ実現に向かってスタートした。同年11月2日、これまでの研究経過にもとづき講堂の規模、機能等について検討され、(1)用途は、講演、音楽、映画、演劇を想定し、多目的ホールとする、(2)客席は1,500程度とする、(3)120人前後の交響楽団による演奏が可能であるものとする、(4)シネマスコープが上映できるよう設備する、(5)回り舞台の可否についてなお検討する、(6)脇花道は下手に設ける、(7)音響、照明、舞台装置等について出来る限り権威者の意見を聞き、それを取り入れることで意見の一致をみた。(小坂秀雄氏と建設専門委員会と打ち合せ、さらに具体的に詰められる。その結果は別項参照。)(8-10頁)

3-02

設立後20年間については「あゆみ」に整備期、発展期、充実期に分けて分析紹介されている。しかし今日、文化講堂は改築が決定しているばかりか、すでに1987年のコンペにより新プランが出来上り、その内容を詰める作業に入っている。新文化会館では図書館機能が地理的に分離され、名城地区に建設される(1991年春に開館予定)。その他の機能については、文化情報センター、国際会議機能が追加された形で現在の所に建設される(1993年

度予定)。ホールについてはコンサートホール(2,000席程度)、劇場型ホール(2,500席)、実験小劇場(300席程度)の3つのホールが予定されている。

単純にこの二つの事実をつなげば、愛知文化講堂は充実期から転換期に入り、当初の役割を果たし、今その30年の歴史を閉じようとしているということになる。改築への背景や理由については鈴木礼治愛知県知事が「21世紀に向けた芸術文化の拠点施設として」建設を企画したこと以上は、当面未調査である。愛知県庁の知事室近くに設置された「新文化開館建設事務局」でのインタビュー調査など今後まだ色々課題が山積している。とりあえずここでは「あゆみ」を頼りに1958年から1978年頃までの経過と問題点を紹介する。

(整備期)

開館当時、表現や活動の場所が強く求められていた。「演劇の分野では、市民劇場という名の新劇公演が、昭和25年から毎年続けて開催され、また東京の劇団のほか、地元劇団や演劇サークルによる公演、高校演劇・職場演劇コンクール入賞作品発表会なども行われ、29年には商工館ホールで第1回新劇協同公演が、30年2月には名古屋合唱団ホールで第1回地元三劇団合同公演が行われ、演劇関係団体として、名古屋演劇ペンクラブ、名古屋演劇同好会、名古屋演劇人クラブなどが結成された。32年8月には名鉄ホールが開館した。

音楽の分野では、各種団体による最初の定期演奏会や発表会があいついで開催されるようになった。27年5月には東海メールクワイアの第1回定期演奏会がABCホールで行われ、その後、28年には名古屋学生交響楽団演奏会が、29年には名古屋大学男性合唱団定期演奏会が、31年には名古屋アカデミーの独唱と重唱の会が、32年にはナゴヤ新声会オペレッタ公演、グリーン・エコー発表会などが行われた。これらは、名古屋市公会堂、中区役所ホール、毎日会館、NHKホールなどで開催されたが、なかでも名古屋市公会堂は、音楽会のメッカであった。

「開館当初は、舞台装置が比較的簡単で、しかも開催期間が短いものの利用が多く、また催し物のない日が続くといった状態も見られた。しかし、それはわずかな間のことで、名古屋において行われる音楽会や演劇公演の中心は、しだいに本講堂へ移って来るようになった。」(82-83頁)

ホールの管理面についても、同じ時期に全国で建設があいつぎ、横の連絡が出来てきて、「全国ホール協会」が1961年(昭和36年)10月に結成された。日本都市センターにおいて総会が開かれ、49館が加盟し、会長に全国知事会長を、副会長に全国市長会長を選出した。吉山日本都市センター常務を理事長に互選した上、事務所を同センターに置いた。この協会には調査、広報、技術、財務の4部会がおかれ、調査部では「全国ホール名鑑」、広報では機関誌「ホール文化」を発行した。

同様な団体として、公立文化施設協議会が1961年9月、東京文化会館、神奈川県立音楽堂、栃木会館が中心となって発足。また愛知県内部だけで愛知県公立文化施設協議会が



1965年6月に設立。さらに1966年4月には、東海北陸地区公立文化施設協議会が発足した。ともに愛知文化講堂が中心となっている。

(発展期)

ソフト面での整備が進む。運営について1965年愛知県文化会館講堂運営委員会が設置された。1969年には行革によって、委員会から会議方式に切り替えられた。理由は未調査。

1964年3月、「愛知県文化会館条例」発布。

使用料金の改訂が行われた。当初のできるだけ広範な人にアクセス出来るようにという精神だけでは運営が困難になったと思われる。独立採算的受益者負担的発想の展開が見られる。

他方、開館後、10年以上経過し、講堂の傷みも目につき改修が必要になった。1972年舞台の張り替え(総檜)や、照明の近代化(U型調光器からシリコン・コントロールド・レクティブファイアSCR調光方式への変更)などを中心にして大規模な工事が行われた。また音響面でも調整卓の近代化を行った。トランジスター方式のミキシング20回路、ライン8回路をもつものになった。

利用状況は、「歩み」の年譜に見るように各分野の一線の公演が行われるようになった。日本舞踊については、1961年2月の御園座焼失により、日本舞踊の公演が可能なように本花道を設置できるようにした。名古屋をどりはかくして御園座再建(1963年8月)までの間、活動の場を確保できた。これを機会に日本舞踊の公演も増えていく。

能楽の公演については、毎年のように公演されたが、1965年5月に中日劇場が開場し、中日五流能の公演がそちらへ移ってからさびしくなった。

新劇については、主として演劇鑑賞会主催による東京の三大劇団、文学座、俳優座、民芸の上演が目につく。

音楽関係については、外国からの一流ミュージシャンの演奏会が続くが、1972年10月に名古屋市民会館が開館すると、大規模演奏会はそちらへ流れるようになった。これは現在、愛知文化講堂が改築される背景として存在している。1,500人規模の座席数では採算面で困難があるようだ。

(充実期)

講堂の近代化の努力は続いた。火災に対する設備(大阪の千日前での火災などから消防法が改正され、厳しいものになったことの結果である)や音響面でもパワーアップが行われた。設備面ではチェンバロの購入が目につく。

全体として確かに戦後の文化活動の大きな拠点として活躍したことは事実である。しかし今日では表現活動の多様化、設備面での近代化の限界など様々な背景があって、名古屋あるいは愛知県の文化的シンボルとしては政財界からも市民からも不満の多いものになっている。文化講堂は、単にホールではなく、美術館でもあり、図書館でもあったから不満はさらに大きいものである。

表 12 「保健科」の3因子性別×教職経験年数の分散分析の結果

第1因子				
変動因	自由度	平方和	F 値	PR>F
性別	1	0.68382034	2.94	0.0881
教職経験年数	2	4.17442029	8.97	0.0002
性別×教職経験年数	2	0.38958672	0.84	0.4344
ERROR	186	43.25593729		
CORRECTED TOTAL	191	51.49382716		
第2因子				
変動因	自由度	平方和	F 値	PR>F
性別	1	0.67986433	3.00	0.0852
教職経験年数	2	0.17022775	0.37	0.6878
性別×教職経験年数	2	0.76076317	1.68	0.1900
ERROR	186	42.21712093		
CORRECTED TOTAL	191	43.43155924		
第3因子				
変動因	自由度	平方和	F 値	PR>F
性別	1	0.36736182	1.51	0.2214
教職経験年数	2	0.59354238	1.22	0.2987
性別×教職経験年数	2	0.01438278	0.03	0.9710
ERROR	192	46.85942585		
CORRECTED TOTAL	197	48.12528058		

**保健科** 保健科第1尺度の「指導内容の工夫」では、教職経験年数の主効果が有意であり (F=8.97, p<.01)、性別の主効果は傾向として (F=2.94, p<.10) 認められた。すなわち、教職経験年数が長いほど保健の指導内容に工夫を加えており、女性教師の方が男性教師より工夫をしている傾向があるという結果が見られたのである。

第2尺度の「保健科への批判」では、性別の主効果にのみ傾向性が認められ (F=3.00, p<.10)、男性教師に保健科の授業に対する批判的態度、意見がやや多いという示唆が得られた。

第3尺度の「保健科の有用性」では有意な差は認められず、この尺度については教職経験年数や性別で回答が異なるということはなかったのである。

なお、3尺度総てで、教職経験年数と性別との交互作用の効果は認められなかった。

**体育科** 体育科第1尺度の「指導内容の工夫」では、教職経験年数でも (F=4.71, p<.01)、性別でも (F=7.57, p<.01) 有意な主効果が見られた。すなわち、保健科の時と同様、教職経験年数の長い教師ほど、体育科の指導内容に多く工夫を加えているという回答が多く、また、女性教師の方が男性教師よりも工夫をするという回答が多いという結果が示されたのである。

第2尺度の「錬成的目標論」は、有意ではなかったが、教職経験年数の主効果が傾向として (F=2.38 p<.10)、また、性別の主効果も傾向として (F=3.00 P<.10) 認められた。体育科の指導目標に錬成的な意義を認める者は教職経験年数の長い者にやや多く、しかも女性教師に比べて男性教師に

- f とくになし。
- g 平日夜間（17：30－21：30） 11万4,500円  
 休日夜間 12万8,500円  
 平日全日 22万9,000円  
 休日全日 28万6,000円  
 ※21：30より30分につき平日1万7,200円、休日2万1,500円  
 ※入場料などの最高額が1,001円以上3,000円以下の場合、これに20パーセント増額。

また3,001円以上の時、50パーセント増額になる。

06-1 1958年（昭和33年）6月。

06-2 1991年予定。

06-3 無し。

06-4 県施設。

06-5 内部については大規模な修理を行っている。

07-1 柿落しについて（「あゆみ」より）

昭和33年5月31日開館を記念して、以下のものが上演された。

狂言「三番そう・橋掛ノ舞」（和泉流三宅藤九郎、和泉保之）

仕舞「船弁慶」（観世流梅若六郎）

舞踊・清元「賀祝梅松桜」（西川流西川とし子、西川貞子、西川美依子）

また5月18日に二回公演で、

午前の部

観世流舞囃子「翁」、能「養老」

赤堀流日本舞踊「美津の椰子」

無形文化財「ばしょう踊」（一宮市北方町）

剣舞、洋舞踊

午後の部

宝生流舞囃子「八島」

和泉流狂言「素ほう落」

工藤流「子宝三番」

無形文化財「ばしょう踊」

剣舞、洋舞踊

5月19日には、

午前の部

観世流の能「鶴亀」

和泉流狂言「素そう落」

同様、3尺度総てで、教職経験年数と性別との交互作用の効果は認められなかった。

生徒観 生徒観に関する項目では、第1尺度の「肯定的イメージ」、第2尺度の「ファッション性」のいずれも、有意な主効果、交互作用効果を見いだすことはできなかった。生徒観については、教師の経験年数、性別による意見、態度の違いが少ないことが示されたのである。

表 15 「保健科」関連項目への回答の平均値

	全体		性別			
	平均	SD	男		女	
			平均	SD	平均	SD
H 1. 保健の授業は健全な身体の形成に役立つ	3.46	0.65	3.48	0.64	3.43	0.66
H 2. 保健の授業は身体の個人差に気付かせるという機会となる	3.14	0.75	3.24	0.72	2.88	0.76
H 3. 私が今使っている教科書の内容は生徒にとって難しい	2.55	0.87	2.60	0.86	2.40	0.86
H 4. 私は健康的な美とは何かについて保健の授業で話すことがある	3.02	0.95	2.92	0.99	3.30	0.78
H 5. 健全な精神は健全な肉体に宿るという考えは保健の基礎となる考えの1つだ	3.49	0.77	3.51	0.79	3.43	0.74
H 6. 私は職業と健康の関係についての解説をしている	3.41	0.79	3.37	0.84	3.51	0.63
H 7. 私は高齢者の健康についての解説をしている	3.06	0.91	2.98	0.94	3.26	0.79
H 8. 保健の授業は生徒の自己理解に役立っている	3.09	0.72	3.09	0.74	3.09	0.69
H 9. 私が今使っている教科書は保健と政治との関わりについての内容が不足している	2.68	0.90	2.66	0.91	2.71	0.89
H 10. 私は健康保持のための運動をするように生徒に勧めている	3.76	0.52	3.76	0.54	3.77	0.46
H 11. 私が今使っている教科書は保健の学習に必要な内容を十分含んでいる	2.92	0.78	2.98	0.79	2.75	0.76
H 12. 保健の授業では生徒が自分の身体と保健の学習内容を具体的に照らし合わせる機会がない	2.69	0.84	2.71	0.83	2.63	0.86
H 13. 私が今使っている教科書は保健と社社との関わりについての内容が不足している	2.55	0.81	2.57	0.81	2.48	0.81
H 14. 私が今使っている教科書では保健で形成すべき学力とは何かが不明瞭である	2.65	0.85	2.70	0.84	2.49	0.86
H 15. 保健の授業では生徒が自分の心理と身体との関わりを考える機会がない	2.29	0.86	2.27	0.85	2.35	0.88
H 16. 私は保健の授業では最近の健康ブームは批判的に扱う	1.89	0.68	1.89	0.70	1.89	0.62
H 17. 健康と環境問題は深く関わっている	3.76	0.50	3.72	0.53	3.84	0.41
H 18. 私は健康保持のための運動を実際に生徒に指導している	3.19	0.90	3.24	0.85	3.05	1.01
H 19. 私は健康増進に役立つ情報は努めて生徒に知らせている	3.36	0.72	3.34	0.74	3.39	0.68
H 20. 生徒にとって自分の身体をよく知るといことは大切なことだ	3.95	0.23	3.94	0.24	3.96	0.19
H 21. 私が今使っている教科書は心理学的な内容が不足している	2.92	0.77	2.95	0.77	2.82	0.77
H 22. 人間の身体は基本的には同じだという考えをもたせる必要がある	3.19	0.83	3.20	0.81	3.15	0.89
H 23. 保健の指導に自信をもっている教師が多い	2.22	0.73	2.24	0.74	2.18	0.68
H 24. 私は生徒に健康増進に役立つ情報の集め方を教えている	2.31	0.84	2.31	0.81	2.33	0.91
H 25. 保健の授業では教育内容、方法で男女を分ける必要はない	3.51	0.79	3.50	0.81	3.54	0.76
H 26. 保健の授業は生徒の健康増進に役立つ	3.22	0.76	3.28	0.73	3.05	0.83
H 27. 保健の授業は健全な健康観の形成に役立つ	3.31	0.65	3.32	0.63	3.30	0.71
H 28. 化粧、服装などは身体に対する意識を高める	2.22	0.84	2.19	0.88	2.29	0.70
H 29. 保健教材に関する知識を十分にもっている教師が多い	2.37	0.72	2.32	0.68	2.49	0.79
H 30. 保健の授業教材の内容の習得が中心となっている	2.90	0.74	2.89	0.74	2.93	0.74
H 31. 私は医療制度についての指導を生徒にしている	2.41	0.85	2.41	0.84	2.44	0.87
H 32. 保健の授業は生涯にわたる健康への態度づくりに役立つ	3.35	0.69	3.36	0.71	3.32	0.66
H 33. 私は保健の授業で健康食品についてとりあげる	2.67	1.03	2.63	1.05	2.80	0.94
H 34. 保健の指導法の研究は停滞している	2.79	0.81	2.84	0.78	2.64	0.88
H 35. 私が今使っている教科書は保健を前向きに考える態度を生徒の中に形成させようとしていない	2.33	0.81	2.32	0.78	2.36	0.89
H 36. 私は健康と美とは結びつくものとして教える	3.16	0.83	3.11	0.87	3.30	0.71
H 37. 私は身体の訓練は健康に結びつくものとして教える	3.31	0.75	3.40	0.75	3.07	0.71

がある。未入手。

〔002〕

01 愛知県中小企業センター

02-1 〒450 名古屋市中村区名駅4-4-39

02-2 (052) 561-4121

03-1 商工業の振興をはかるため、特に中小企業へのサービスセンターとして発足した。講堂は会社の総会、永年勤続者表彰式、従業員演芸会、講演会、研修会などの利用に供する目的で建設された。

03-2 不明。

03-3 不明。

14 財団法人・愛知県中小企業振興公社が愛知県から委託を受けて運営している。

05-1 外部写真あり。No. (002-05-1-①)。センター発行のパンフレットにも外部・内部写真あり。No. (002-05-1-②)

05-2 センター発行のパンフレット「講堂ごあんない」に図面あり。No. (002-05-3)

05-4-a1 強電パッチング方式、6kWフェーダー60本、手動3段プリセット6グループ。

a2 ボーダーライト3列、フットライト1列、 Horizont ライト上下、サスペンションライト2列、シーリングライト、フロントライト、ストリップライト、ステージスポットライト、フットスポット、ソフトアークスポットライト、センターピンスポットライト。

a3 なし。

b1 放送技術規格に適合するチャンネルハイファイステレオ増幅器、テープレコーダー(2トラックステレオ2台、4トラックステレオ1台、4トラックモノラル2台)、レコードプレーヤー(ステレオ2台)、マイク回路6本、エレベーターマイク舞台前面3本。

b2 不明。

c1 固定型。

c2 間口12m、奥行9.5m。

c3 7.4m

c4 不明。

d1 なし。

d2 大迫り1基。

d3 なし。

d4 不明。

先の(3)の後半で、尺度別に回答傾向については検討しており、個々の項目におろしてまでの検討はここでは行わない。資料を示すにとどめる。

#### (4) 自由記述の内容

調査では、「最近の生徒の持つ身体観、身体文化についてお気づきのことがあればぜひお書きください」という設問で自由記述を求め、91の回答を得た。その内容をカテゴライズし、ケース数に具体的内容例をつけて、結果を表21に示した。内容が多領域にわたる場合は、一人の回答を複数回カウントするため、ケース数の合計は91より多い。

ここで見られた結果では、髪型の乱れを気にするとか、スリム志向といった「見かけ志向」の強さと、疲れるようなことや努力を嫌う「安楽志向」の強さをあげる者が多いことが示された。これらは、因子分析に基づいて検討した結果とも軌を一にする結果である。そのほかには、「体力が劣る」、「活動内容がアンバランス」、「健康管理がルーズ」、「文化依存的」、「無関心」が、10を越える。総じて、ネガティブな方向の記述が多い。ポジティブな方向の回答は「その他」にカテゴライズされた、少数のケースで見られたに過ぎない。ただ、ポジティブな方向の回答の中に、偏差値の高いいわゆる進学校であるからといった含みの記述が見られたのは興味深かった。

表17 「生徒観」関連項目への回答の平均値

	全体		性別			
			男		女	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
S 1. 訓練に耐える根性がない	3.18	0.82	3.20	0.86	3.12	0.68
S 2. 体力がある	1.98	0.64	1.97	0.69	2.02	0.48
S 3. 流行のスポーツに目を奪われる	3.04	0.80	3.12	0.81	2.82	0.76
S 4. 体育を教えていて手ごたえがある	2.41	0.81	2.42	0.86	2.38	0.68
S 5. 心と身体の結びつきに気づいていない	2.90	0.78	2.96	0.77	2.74	0.77
S 6. 病気をしやすい	2.82	0.86	2.93	0.88	2.53	0.73
S 7. 身体を鍛えようとする意欲がある	2.14	0.72	2.16	0.77	2.09	0.61
S 8. 健康に配慮する気持ちをもっている	2.27	0.71	2.24	0.73	2.35	0.67
S 9. 外見の美しさを競う	2.97	0.88	2.92	0.93	3.09	0.72
S 10. 技術より服装、身だしなみを気にする	3.17	0.83	3.16	0.87	3.21	0.71
S 11. 美しい身体をもっている	2.20	0.63	2.13	0.62	2.39	0.62
S 12. 外見を飾ろうとする	3.29	0.78	3.29	0.83	3.32	0.66
S 13. 強く、速い身体に対する憧れがある	2.89	0.82	2.99	0.84	2.62	0.71
S 14. 保健の授業に意欲を示す	2.10	0.74	2.05	0.75	2.23	0.71
S 15. 保健の内容のもつ重要さを理解していない	2.75	0.80	2.79	0.82	2.65	0.74
S 16. スポーツマンには人気がない	1.86	0.77	1.87	0.78	1.82	0.77
S 17. 過程より結果にこだわる	3.20	0.77	3.26	0.75	3.05	0.79
S 18. 体育が嫌いな生徒が多い	2.24	0.77	2.20	0.78	2.35	0.74
S 19. 身体の有効な使い方を知らない	3.15	0.68	3.15	0.71	3.14	0.61
S 20. ファッションには敏感である	3.60	0.57	3.59	0.60	3.61	0.49
S 21. 自分の体力の把握ができていない	3.17	0.65	3.20	0.65	3.09	0.67
S 22. 感性が豊かである	2.56	0.80	2.56	0.81	2.55	0.77

- 05-3 別紙 No. (003 - 05 - 3)
- 05-4-a1 別紙 No. (003 - 05 - 4 - a 2)
- a2 同上。
- a3 記憶装置付き。
- b1 別紙 No. (003 - 05 - 4 - b 1)
- b2 1.6。
- c1 固定型 (プロセニウム・アーチ型)。
- c2 541.1 m<sup>2</sup> (舞台+袖)。
- c3 11.3 m (アーチ部)。
- c4 参照別紙 No. (003 - 05 - 4 - a 2)
- d1 無。
- d2 有。
- d3 スッポン。
- d4 有。
- d5 有。
- d6 無。
- d7 オーケストラ・ピット、特別室楽屋、リハーサル室、浴室。
- e1 1666 ~ 1544。
- e2 階上席あり。
- f 地下鉄の震動音を消すのに苦労し、成功した。  
建築音響が建築当初から現在まで変化していない。
- g 別紙 No. (003 - 05 - 4 - g)
- 06-1 昭和 55 年 10 月 23 日。
- 07-2 主体的企画。
- ・ファミリーコンサート (61 年～、全国)  
61・62 年童謡、63 年ニューミュージック
  - ・年数回名古屋独自の企画 (56 年～、無料)  
ポピュラークラシック、落語、ぬいぐるみ劇 etc.
- 07-3 ポピュラー系が多い。
- 07-4 昭和 59 年 ブロードウェイ・ミュージカル “THE WIZ” ②

[004]

01 愛知県勤労会館

02-1 〒466 名古屋市昭和区鶴舞1-2-32

02-2 (052) 733-1141

03-1 愛知勤労会館の前身は「愛知労働会館」。労働運動の活発化に伴い、各単組は組合活動を展開する拠点として、各種集会を行うための公共施設を必要としていたが、戦災により、当時名古屋市内には適当な公共施設が少なく、愛知県労働組合会議は、早くから県市当局に公共施設としての労働会館建設を申し入れていた。(参考までに「10年のあゆみ」によると、昭和21年12月現在で組合数696、組合員数185,123人、22年6月現在で組合数816、組合員数253,240人、23年6月現在で組合数1,066、組合員数37,306人。21年1月28日に総同盟愛知県連合会、21年8月12日に愛知県産業別労働組合会議、22年2月5日に愛知県労働組合会議が結成され、県下労働運動の指導的役割を果たした。以後頁数は「あゆみ」のものである。) この動きが一つの波となり要求となって現れたのが、昭和22年5月1日第18回愛知県地方メーデー大会であった。「労働会館を即時建設せよ。」の要求が出た。これに知事青柳秀夫が前向きに回答した。(2頁)

県下労働組合の要望により建設された愛知県労働会館の竣工式は、昭和23年5月15日午後1時から、愛知軍政部ダニエル中佐、加藤勘十労働大臣、青柳知事らの列席のもとに、盛大に挙行された。労使、県市が一体となって取り組んだ会館建設には、多くの困難を伴ったが、行政期間の所管に関わる戦後最初の労働会館がここに誕生した。(5頁)

会館の管理は県が行うことに決定したが、会館運営の適正をはかるため、労働団体、経営者団体及び学識経験者の代表者で構成された労働会館運営委員会が、昭和23年6月1日に設置された。6月18日に第1回運営委員会が開催され、会館の使用については、「原則として一般に開放するが、建設目的から労働組合の使用については一般に優先することとし、労働組合の使用料は一般の3分の1とする」と言う労働組合優先の原則が打ち出された。この原則は、会館の基本的性格として、43年4月に会館が廃止されるまで堅持された。(6頁)

同会館は、昭和28年に宿泊施設を備えた勤労ホームを増築するなど施設の充実を重ねたが、施設の老朽化が進み、また利用方法の多様化により、時代の要請に応えられなくなった。このため各種の設備内容をもった総合的福祉施設を建設しようとする機運が高まり、陳情が相次いだ。昭和45年6月1日、愛知県勤労会館は、愛知県労働者福祉施設条例に基づき「労働者の福祉を増進するための労働者福祉施設」として設置され、全国にも類例の無い総合的福祉センターとして開館した。

なお同会館内のホールに関しては、同じ条例に「労働者の文化及び教養の向上をはかるため、講堂、小ホール、会議室、視聴覚室、講習室その他の施設を利用させること」と規定され、管理課長以下15名がその業務に当たる。



- 03-2 特になし。
- 04 愛知県施設であり、県職員によって管理されている。
- 05-1 外部写真有。「あゆみ」(コピー) 内部。No. (004-05-1)  
会館の案内パンフにも外部、内部写真有。No. (004-05-1)
- 05-2 久米設計事務所。フジタ工業名古屋支店。
- 05-3 図面有。No. (004-05-3)  
会館側資料。そのほか「10年のあゆみ」97頁。「街の辞典」256頁にもある。
- 05-4-a1 1 SUS (16回路) 1 B 0 84灯 (上中下3区分)  
2 SUS (12回路) 2 B 0 84灯 (同上)  
3 SUS (12回路) 3 B 0 72灯 (同上)  
6 kWサイリスタ調光器 70回路。調光卓丸茂電機電子クロスバー方式3段プリセット  
80本
- a2 シーリング投光室を客室天井に2列と客席側壁の両側に2室ずつ配置。フットライ  
ト、花道用フットライト (上手、下手)、ボーダーライト3列、サスペンションライト  
3列、水平ライト。  
発足当初のセンターピンスポットライトはアーク式。1977年度～1978年度 (昭和52、  
53年度) にクセノンランプ式スポットライトに取り替え。1979年にはサイリスタ調光  
器及び調光操作卓を更新した。
- a3 とくになし。
- b1 ダイナミック型、ベロシティー型、コンデンサー型等各種マイクロホンを用い、ス  
ピーカーは、プロセニウムを主にプロセニウムサイド及び客席の側壁と天井に配置  
し、これを60Wの主増幅器5台とマイク入力14、ライン入力8の調整卓1台によっ  
て調整している。また4チャンネルのワイヤレスマイクを備え、エレベーターマイク  
(マイク昇降装置) を3箇所を設置している。  
ピアノ4台。音響反射板。
- c1 固定型。
- c2 間口 17.5メートル×奥行15メートル  
面積 671.8平方メートル
- c3 9.5メートル。すのこ天井までは23メートル。
- c4 両方に約160平方メートル (11×15) の脇舞台。
- d1 なし。
- d2 有り。大迫り1基。中迫り (3分割) 1基。
- d3 スライディングステージ2箇所あり。  
オーケストラボックスは迫り式。客席、エプロンステージにもなる。
- d4 奈落 508.7平方メートル。

表 21 生徒の身体観、身体文化に関する自由記述結果

カテゴリー	ケース数	具 体 的 内 容 例
見 か け 志 向	40	髪型のみだれを気にする、スリム志向
安 楽 志 向	38	疲れることを嫌がる、汗をかきたがらない、運動ぎらい、努力しない、耐性が低い、錬えようとしていない
体 力 が 劣 る	17	基礎体力がない、一定の姿勢を保てない、筋力が弱い
活動内容がアンバランス	15	気の向いたことしかしない、基礎的運動を嫌う
健康管理がルーズ	12	夜ふかしをする、朝食を食べない、よいことが分かっているにもかかわらず実行しない
文 化 依 存 的	12	ファッション志向、流行の食物を無批判に食べる、マスコミ依存
無 関 心	11	興味をもたない、あきらめている、持続的に考えない、意欲がない
娯楽としてのスポーツ	9	スポーツを息抜きと考えている、スポーツを気ばらしととらえている、熱中しない、部活をしない
非 主 体 的	7	いわれないとしない、やるべきことが分かっていてもしない、競争させるとやる、規則は守る
人 並 志 向	6	競争を嫌う、目立つことを嫌う、身体表現でテレを示す、声を出さない
上 達 を 志 向 し ない	6	チャレンジしない、自己の可能性を追求しない
神 経 質	5	手をよく洗う、ごみに触れようとしていない、保健室の利用が多い、体育授業を休む
体のコントロール下手	5	
結 果 主 義	5	単調な訓練を嫌う、パーフェクトな結果のみを評価する
受 験 重 視 の 弊 害	5	体育を無視、成績と結びつけると努力する
非 集 団 性	4	チームゲームを嫌う、体を触れ合わない、協力できない
そ の 他		精神的に弱い(2)、スポーツが好き(2)、中学校での指導の格差が反映、力よりスピード重視、運動エネルギー強い、着実に努力する、新しいことへの感受性強い、美しくなるためのスポーツという捉え方、精神的な悩みを持っている、運動嫌いは減った、音楽に合わせて動くのを好む、身体差に敏感、昔同様頑張る、強いことを志向、チームゲームが好き * ( ) 内はケース数

注： 本来この欄に掲載されないケースに属すが、調査の中間報告ということでもあり、調査実態が分かるように、また協力していただいた劇団への敬意も考慮して取り上げるようになった。

◆  
◆  
[006]

01 長円寺会館：ホール「サンギータ」

02-1 〒460 名古屋市中区栄2-4-23

02-2 (052) 231-0955

03-1 長円寺会館設立の趣旨

- ・お寺というのはもともと地域の文化活動の拠点であった。
- ・名古屋の文化活動の団体の練習・発表の場が足りないのを手助けする。
- ・お寺の改築の時期にあっていた。

文化活動に資する：発表の場を→2Fホール「サンギータ」

練習→1F、3F

(1F大会議室、2Fホールとギャラリー、3F会議室5)

03-2 不明。

03-3 自主企画(「千々の歌を求めて」民族音楽シリーズのように)をもっとしたい。メインは2Fホール。

音楽関係のコミュニケーションを含めたセンターにしたい。

プレイガイドのような機能も広げたい。

04 宗教学法人。お寺「長円寺」(建物「長円寺会館」あるいは「長円寺制心会館」)。文化活動に関しては長円寺会館。

05-1 別紙 No. (006-05-1)

05-2 設 計 者 岩城誠作設計事務所

施工会社 戸田建設

05-3 別紙 No. (006-05-3)

05-4-a1 不明。

a2 15チャンネル操作盤

ボーダー、1サス、2サス、シーリング、ピンスポット

b1 スタジオ録音用オープン・カセットデッキ

8チャンネルミキサー

PAシステム(拡声・増幅)

b2 残響：空席時 0.62秒、満席時 0.37秒

c1 固定型。

## 文 献

杉江修治・大橋博明・小峰総一郎・水野りか 1987 現代青年の身体文化に関する調査的研究 中京大学教養論叢、28-3、1-42.

- 03-2 不明。
- 03-3 地域文化向上の一翼を担いたい。利用者に愛されるホールを。
- 04 所有：中部電力（株）  
運営委託：中電ビル（株）
- 05-1 別紙 No. (007-05-1)
- 05-2 音響設計指導：東北大学 二村・城戸両教授、設計者：日建、施工会社：鹿島建設
- 05-3 別紙 No. (007-05-3)
- 05-4-a1 不明。
- a2 全システムコンピュータ化。客席・舞台とも SCR 式調光調色可能。調光シーン記憶 500、他別紙 No. (007-05-4-a2)
- b1 残響付加装置・テレビ・ラジオ中継放送可能、ワイヤレス装置つき、音ランニング可能、他別紙 No. (007-05-4-b1)
- b2 残響 満席時 0.9 秒、空席時 1.2 秒、同 1.3 秒（反響板無し）
- c1 固定型。
- c2 間口 12.5 m、奥行 6.19 m。
- c3 7.545 m。
- c4 約 80 m<sup>2</sup>（準備室）。
- d1 無。
- d2 無。
- d3 花道 ホイスト（搬入口）。
- d4 無。
- d5 有（控室）。
- d6 有。
- d7 浴室。
- e1 460。
- e2 ワンスロープ型。
- f
- ・ホール運営課山腰氏によるホール音響補正（電気音響使用せず）。
  - ・建築当初より音響設計に力を注ぐ。
- g 別紙 No. (007-05-4-g)
- 06-1 昭和 38 年完成 5 月 13 日開館：こけら落とし
- 06-2 昭和 51 年ホール付帯設備改装（電気音響的にのみ）：設備改善はほぼ 10 年毎
- 07-3 中電使用分 25%、洋楽 48.8%、邦楽 18.6%、講演会その他 7.6%（S 60 年）
- 07-4 文楽公演。  
人形劇（中国・ソ連・日本）：1988 年

[008]

01 電気文化会館コンサートホール

02-1 〒460 名古屋市中区栄2-2-5

02-2 (052) 204-1133 (代)

03-1 電気と電気事業についての理解を得るとともに地域社会の向上に寄与する中部電力のイメージ向上 (電気文化会館全体)。

既設ホールの利用実績、地元の要望、多目的ホールから専門ホールへという時代の趨勢を考慮し、当地方初のコンサート専門ホールとした。以下、別紙パンフレット〈電気文化会館のコンサートホール〉P4参照。

地元音楽家の利用を見込む——現実には外国人を含む外来演奏家の利用が多い (予想外)。

03-2 専門家用の利用の場としての要望が多い。

03-3 より企画性のある運営をしたい。ただの貸しホールではなく、このホールの特色を出す企画を。

室内楽リサイタルに力を入れてゆきたい。

04 (株)電気文化会館が建設し、運営。

(株)中部電力が資本金100%出資の子会社:独立採算

05-1 別紙 No. (008-05-1)

05-2 設計者:(株)日建設計+日本楽器製造建築音響研究室(チェック) 施工会社:鹿島建設・大成建設共同企業体

05-3 別紙 No. (008-05-3)

05-4-a1 不明。

a2 別紙 No. (008-05-4-a1)

b1 別紙(録音用) No. (008-05-4-b1)

b2 空席時1.8秒、満席時1.6秒(いずれも反射面使用時:吸音側使用時はいずれも0.2~0.3秒減衰)(公称)

(1.7秒、1.4秒)

c1 固定型(シューボックス型)。

c2 13~8m×8m。

c3 80cm、天井高8~9m(前が高い)。

c4 無。

d1 無。

d2 無。

d3 残響可変装置(客席側壁)。

d4 無。

d5 有。

- d6 無。
- d7 リハーサルルーム、浴室。
- e1 395 席内取外し式 19 席。
- e2 ワンスロープフロア。
- f 親子室の設置。
- g 別紙 No. (008-05-4-g)
- 06-1 構想昭和 55 年 具体的構想 57 年～  
建築 58 年 11 月着手 61 年 6 月末完成
- 07-2 オープン時は多様なものを行った。  
ピアノ・リサイタル、ジャズ他
- 07-3 別紙 No. (008-07-3)
- 07-4 ヒリアード・アンサンブル、シュプリアン・カサルス (pf)、ベルリン弦楽合奏団、アレク  
サンダー・マルコフ (Vn)、川口エリカ (Vn)
- 07-5 クラシックのお客が広がると良い。

◆ ————— ◆

[009]

- 01 **ふなきスタジオ**
- 02-1 〒462 名古屋市北区東水切町 2-18
- 02-2 (052) 912-1611
- 03-1 創設者の舟木淳氏は 1957 年に「劇団名古屋」を創立したが、1976 年末に退団した。氏は、  
中区と東区に集中していた名古屋の演劇文化を四分割せよとの主張を永年抱いていたが、  
その四区域の中の一つ、名古屋北部のこの地に、自分の城としての劇場を建設した。名古  
屋 200 万市民の四分の一、つまり、50 万人に対して責任ある劇づくりをしようとしたとい  
う。
- 03-2 アマチュア劇団の指導や市民文化サークルの堀り起こしなどの成果をあげてきた。スタジ  
オの地理的位置は利用者には不便かもしれない。
- 03-3 演劇の基本であるリアリズム演劇（リアリズムとナチュラルリズムとは異なると舟木氏は強  
調する）を重視しながら、大人が観ても楽しめる芝居づくりを目指していきたい。
- 04 「舟木プロ」の経営
- 05-1 外部写真あり。No. (009-05-1)
- 05-2 中央設計（プランは舟木淳氏本人）。
- 05-3 なし。
- 05-4-a1 不明。
- a2 スタジオ内のどこにでもライトをつれるように設計されている。

- a3 なし。
- b1 不明。
- b2 不明。
- c1 自由移動型（スタジオ4間×5間の空間を自由に使いたい。円形スタジオとしての利用も考えている）。
- c2 スタジオ（4間×5間）に4段の客席を設けると、舞台として利用できる空間はスタジオの約二分の一である。
- c3 不明。
- c4 なし。
- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 なし。
- d6 なし。
- d7 なし。
- e1 80～100席。
- e2 ワンフラットフロア
- f なし。
- g 平日全日 13,500円、土日祝日全日 15,500円。

06-1 昭和51年8月。

06-2 なし。

06-3 なし。

06-4 なし。

06-5 なし。

07-1 昭和56年 ふなきスタジオ5周年記念公演、舟木淳ひとりの会 朗読「高瀬舟」ほか、ひとり芝居「こい」。

昭和59年 ふなきプロ創立15周年記念公演 ロバート・ボルト作「花咲くチェリー」。

昭和62年 ふなきスタジオ10周年記念公演 A・アルブーゾフ作「古いアルバート街の物語」初演。

昭和62年 名古屋演劇フェスティバル参加 舟木淳ひとりの会パートⅡ牧野不二夫作「黒子」ステージトーク「勲六等単光旭日章一父を語る一」。

07-2 名古屋演劇フェスティバルへの参加など。

07-3 「劇団ふなきスタジオ」の公演を中心に、若い人たちの演劇グループ、会合、演説会など。今後は寄席をやる予定もある。



- 07-4 多数。  
07-5 昭和 63 年名古屋演劇フェスティバル参加作品「古いアルバート街の物語」公演パンフレットあり。No. (009-07-5)
- 

(010)

- 01 劇団 PH-7 アトリエ
- 02-1 〒464 名古屋市千種区内山 1-10-12 上野ビル 3F
- 02-2 (アトリエ) (052) 733-0741  
(代表菱田氏自宅) (052) 791-1991
- 03-1 アトリエは何よりも稽古用であるが、劇場を借りるとお金が必要であり、ただで公演できるのが魅力で今回で 2 度目。今後もやるつもりである。
- 03-2 基本的にスペースが狭い。天井も低いので照明に困る。しかし客席を狭いステージのまん中に置くという発想で次の公演「キラー・リカード」を持つなど限られた条件の中で意欲的だ。
- 03-3 こういう形で進むだろう。「こんなもんじゃないかなー」とは、代表の菱田氏の弁。なぜなら団員はサラリーマンであるし、各々がねん出出来るお金は多くない。現在の部屋も家賃 8 万円払っている。団員 10 名として一人 1 万円の会費が必要。その上に劇場公演をやってきた。団員は出入りがある。結婚、出産、転勤、創立 (1983 年) 以来のメンバーは 2 人だけである。
- 04 アトリエはレンタルで、家賃 8 万円で借りている。貸す場合は劇団の収入としている。
- 05-1 写真有り。No. (010-05-1)
- 05-2 不明。3 階建ての鉄筋ビル (一部 4 階) で、1 階は喫茶食堂。2 階は会社事務所。いわゆる貸しビル。
- 05-3 概測の図面有り。No. (010-05-3)
- 05-4-a 1 民間の住宅であったし、前は麻雀荘であったので、とくに配線を考えてない。許容アンペアが低いので 500 W が 3 つ同時に使えない。発電機を使ったことあり。
- a 2 照明業者「闇派」の機具を管理していて、種類は多い。B 級遊撃隊が東京公演 (1989 年 3 月) に今回使う予定がある。  
500 W×20、1000 W×7、スモーク、エフェクトあり。
- a 3 なし。
- b 1 PA 機器はあるが、狭い空間なので特に必要なし。
- b 2 近所から苦情がくることがある。菓子箱をもって頭を下げに行くことあり。
- c 1 自由 (要するにアパートの仕切りを外した空間と思えばよい。)
- c 2 L 字型に空間があり、横約 7.6 メートル、縦約 7.15 メートル～4.15 メートル。

- c3 2.5メートル
- c4 物置があり、袖として使用出来る。
- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 なし。
- d6 なし。
- d7 なし。
- e1 最大 50 人位。(なお劇団の最大動員数は、400 人を越えていない。)
- e2 フラット (アパートの仕切りを取り外した空間であるから舞台も客席も同じ形態である。)
- f とくになし。
- g 上演 全日 1 万円  
稽古 プロ 全日 5,000 円  
学生 全日 4,000 円  
宿泊 全員で 5,000 円 (人数制限はない。) 実績として七つ寺スタジオを使用する劇団が宿泊所に使うことあり。
- 06-1 (使用開始年) 1986 年春
- 06-2 なし。
- 06-3 劇団アトリエは、前は池下にあった (1984 年～1986 年)。
- 06-4 代表は、劇団創立以来菱田一雄氏。彼は以前は、「ダンシング・スペース」という劇団を持っていた。
- 06-5 なし。
- 07-1 試演 2 回、公演 1 回。詳細は不明。
- 07-2 不明。
- 07-3 不明。
- 07-4 とくになし。
- 07-5 菱田氏とのインタビュー録音テープあり。No. (010-07-5)

[011]

01 東別院青少年会館ホール

02-1 〒460 名古屋市中区橋2-8-45

02-2 (052) 331-9578

03-1 東別院が戦後再建された頃、会館・ホールを建て、青少年の育成に資したいとの願いは強くあった。幾度かその計画は検討されが、1968年(昭和43年)になって親鸞聖人七百回大遠忌記念行事の一端として建設されることになった。会館の綱領が作られ、「東別院青少年会館は親鸞聖人の精神を体し、若い人たちが真に生きる喜びにめざめ、限りなく人を愛し、社会を愛し、自然を愛し、純粋でたくましく育つための広場となることを願いとする。」

会館には、図書館、ホール、各種小会議室、そして仏式の結婚式場、レストランが入っている。理想的には親鸞の教えを広めることが唱われているが、単に信徒の人たちに説教をする場所ではなく、広く青少年に文化活動の機会を提供することが具体的課題となっている。

03-2 開館後5周年を記念して記念誌「あしあと」が出版された。それによると、かなりの成功を得ていることがわかる。

まず東別院の竹中輪番と千田総務部長の努力により、当時名古屋西図書館の館長であった勅使逸雄氏が初代館長に着任した。図書館長が結婚式場の責任者でもあるわけだからその面ではさぞかし大変であったろうと思われる。しかしその他の文化活動については彼の存在が大きく影響した。開館五周年記念の「図書目録」が示すように彼の専門領域と言うべき図書館作りだけでなく、読書会からはじめて講演会、子供教室、サークル活動など多方面での文化活動に広く貢献した。彼が児童文学や人形劇や演劇に関心を寄せていたことも幸いしたであろう。当時新興宗教の過度な活動に対する批判が大きかっただけに苦労があったが、宗教のPRに終わらない優れた活躍を見せている。

設立後10年くらいは、つまり1970年代はそういう訳で青少年のサークルも「あしあと」の年表に見るように大変活発であったが、現在は低迷気味で、利用率も活動の内容も低落している。その理由としてこの会館は、元々内輪での利用のために作られたから、一般の利用には使いにくい。エレベーターもない。入口も分かりにくい。一階の正面は結婚式場で、二階の10人から70人のサークル室と三階の貸しホールは、横の入口から入る。寺からの援助はあるが、独立採算制であるため、二、三階の一般への公開は空いているときのみであった。こうした事情の上に、他に文化ホールやカルチャーセンターなどが新たに多く生まれてきた事実もある。またホールの管理を担当して長い間現場を見てこられた俳優でもある清水甚也氏の言うように、70年以降の管理社会が青年のエネルギーを様々な形で吸収して行って豊かであったサークル活動が減って行った。そして企業戦略から生まれる決起集会に使われて行く現象がこの小さなホールを通して見える。

三階のホールは大きな催し物には向いていない。座席も600人ほどであるし、舞台の奥行きが6メートルと狭いし、袖が無くて大道具が置けない。商業演劇の公演はなく、演劇の利用は少ない。現在修繕が検討されているが、それを行うと消防法によってホールの席は600人から450人になる。壁から1.5メートル離して、8列の10人席が一つのブロックで、再び1メートルを空けて次のブロックを考えるのでそうになってしまう。西別院も200人位のホールを検討しているようで、3年前に見学に来た。

しかし親子劇場の発祥地と言うべき存在であった。「現代のマスコミ文化に強く影響されている子どもたちに、本物の文化に接する機会を与えてやりたい。その一つとして、まず、子供に良い芝居をナマで見て貰おう。」と言うわけで加納氏らが努力して1969年から「子供演劇教室」が1年1回開催されてきた。その運動は「あしあと」(66頁)にあるように成長発展するが、会場として当館が十分でなかったため、より広い会場を求めて移動して行った。

身障者の運動もここがかなり中心であった。社会福祉の運動は当時は民間の方が主導的だったわけで、公的機関が乗り出すのはそれ以後である。

また当館は、現在各区のある「青年の家」のモデルでもあった。中村区からスタートして以後、今日まで多くの「青年の家」が建てられたが、その必要性を証明してみせた施設であった。

03-3

現在収入は結婚式場、貸しホールからのものが主で、かつては高砂殿、熱田神宮と並んで年間400以上の結婚式をあげていたが、昭和56年ころから利用率は下降する。現在では普通の結婚式場なら倒産してもおかしくない営業成績になっている。黒字になった年は過去20年間で少ない。プロジェクトチームを作って今後会館の維持をどうするか、収入源であった結婚式場の利用が激減しているので、二階の利用をどう活性化するか。一般と同じでは創立の趣旨に反するので、どのように特色を出すかなど研究中である。建物の改善もエレベーターなどを含めて利用者のために検討中だが、建築基準も変わって単純に答えを出せなくて、現在造形短大の先生や他の大学の先生にプランを依頼している。

再建の予定は莫大なお金が必要なので当面はない。また東別院だけで結論が出せない。別院を支えている700の寺があってその合意が必要である。営業面を考えると、税金は人生講座や結婚式自体などの宗教活動には課せられないが、貸しホールの営業や部屋貸しには課せられる。本来が寺の施設なので宗教活動と一般への公開との兼ね合いは常に問題として存在する。

舞台管理担当の清水甚也氏によると、単に受身の運営ではなくかつての「子ども演劇教室」のような積極的な企画も考えているという。

注： 報告書を校正中の情報であるが、1989年6月現在、同会館は修築工事に入った。舞台を前方に張り出し、搬入口も新たに作り、客席も後部を移動式の階段席にする模様である。そして、名演会館とタイアップして東西ならびに地元のニュー・ウェイブ・シアターを紹介

- 介することになる。
- 04 宗教法人
- 05-1 有り。No. (011-05-1)
- 05-2 日建設計事務所(中川氏)、施工は竹中工務店。ただし「あしあと」によると、総合設計は、早稲田大学の田辺奏氏監修であった。建築は当初評価を受け、賞も貰っている。
- 05-3 有り。会場側パンフ。No. (011-05-2)
- 05-4-a1 不明。
- a2 ボーダーライト1式、 Horizont ライト上下1式。  
サスペンションライト1式、シーリングライト1式、ステージスポットライト(1kW)8台。ミラーボール1台。  
ピンスポット1台。  
詳しくは「東別院青少年会館施設ご使用のご案内」参照。
- a3 映写室あり。
- b1 「使用案内」参照。No. (011-05-4-b1)
- b2 同上
- c1 固定型
- c2 12.6メートル×6メートル
- c3 5.1メートル
- c4 不明。プロセニウムアーチから左右に2-4メートル位。
- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 有り。舞台下手側の控え室。
- d6 なし。
- d7 ホリゾントの後ろに通路がある。その他はとくになし。
- e1 舞台すぐ前の座席460(15メートル×16.5メートル)が移動式で、後ろに固定席が144席ある。
- e2 ワンフラットフロア。
- f 照明は総合プロダクションふなきへ委託管理(劇団名古屋の清水甚也氏担当)。
- g 平日全日料金 6万9,000円  
土、日、祭日全日料金 9万6,000円  
入場料を徴収する上演は3,000円以下のとき、30パーセント増し。また照明・音響は別途有料。器具備品の使用には指定技師を雇うことが条件になっている。有料。  
詳細は、「使用案内」参照。No. (011-05-4-g)

- 06-1 1968年(昭和43年)4月20日(建築には2億3,000万円を要した)。
- 06-2 音響設備と照明の調光卓を替えた以外、大きな修築はない。
- 06-3 なし。
- 06-4 なし。
- 07-1 「あしあと」の年表に開館後5年間については詳しいが、  
 1968年4月20日(開館式)西川鯉三郎舞踊「三番そう」  
 1969年3月子ども演劇教室。26-27日(全6回公演)  
 未来座「白雪姫と森の仲間たち」  
 1969年12月 子ども演劇教室25-26日(全6回公演)  
 結城座「セザール王子の冒険」「寿獅子」(結城孫三郎氏の人形劇)  
 1970年2月 子ども演劇教室14-15日(全5回公演)  
 むすび座「トラックとらすけ」「ピコちゃん空を飛ぶ」(人形劇)  
 劇団名古屋「3匹の子豚」  
 1971年3月 子ども演劇教室5日(全3回公演)  
 むすび座「さるかにばなし」  
 劇団名古屋「ももとあまんじゃく」  
 3月21日-23日 会館企画  
 前進座「親鸞」  
 1972年3月 子ども演劇教室4日(全2回公演)  
 むすび座「小さいお城」  
 劇団名古屋「ぶす」  
 このほか、最近では、親子劇場の企画で劇団「風の子」の「宝のつるはし」、結城座の「円空」、劇団「星月光」、人形劇国際人形劇フェスティバルの公演があった。国際交流会にも国際会館が伏見に出来るまでは当館で続けていた。各国の舞踊や音楽を紹介したりしてきた。参考までに、70年代にチリのアジャンデ大統領の追悼抗議集会が開かれ、遺児となった娘さんを迎え多くの参加者があった。  
 またESSの英語劇は、15年間続けている。その背景には清水氏らの熱心な協力がある。
- 07-2 1971年の前進座「親鸞」
- 07-3 親子劇場の企画による児童劇団の利用が多い。ピアノの発表会、保険会社や労働組合の講演や会議、研修などが多い。  
 新興宗教団体には貸さないが、一般に広く貸している。政治団体や伝統的宗教団体にも貸している。
- 07-4 1971年の前進座「親鸞」
- 07-5 開館5周年記念の「あしあと」、「図書目録」、「東別院青少年会館施設ご使用のご案内」。事務管理の小笠原雅仁氏、武田智氏、舞台管理の清水甚也氏のインタビューによる録音

[012]

01 平針小劇場（名芸アトリエ）

02-1 〒468 名古屋市天白区平針1-1808

02-2 (052) 803-2922

03-1 なによりも劇団名芸のホームグラウンドとして、社会的テーマをもった創作劇の上演、シェークスピアなどの古典劇、近代古典の名作の上演、そして地域に定着した子供劇の上演などを展開すること。

03-2 劇団創立以来、全員が働きながら演劇活動を続けてきたことの絆と支持者の信頼から、現在の平針小劇場建設も可能となったが、他方、それが甘えともなり創造的な向上が課題となってきた。

03-3 今まで以上に、芝居を見る機会の少ない人たちに楽しく生きていく糧となる演劇を見てもらいたい。

04 劇団員の共有。

05-1 有り。No. (012-05-1)

05-2 設計は劇団員が話し合って検討し、施工会社と相談して煮詰めた。  
施工は古井建築株式会社。

\*参考までに「むすび座」のアトリエも同社が建設した。

05-3 有り。No. (012-05-3)

05-4-a1 専用8回路。リムパック2台(40アンペア18回路)

a2 1キロワットスポット 10台

500ワットスポット 20台

200ワットエリアライト 30台

ピンスポット 2台

ストリップ4燈6本、DFレンズ、ベビースポットなど。

a3 回線数は、臨時に増やすことも出来る。

b1 アンプ100ワット×2

ミキサー6チャンネル

PA(ヤマハ製)80ワット×2

b2 反響音があるが、工夫してカバーしている。

c1 自由型。ホール空間が舞台ともどもフラットなワンフロアだが、ステージはタッパの関係で固定位置となっている。

c2 9メートル×7.2メートル

- c3 8メートル。ただしとばしの関係で有効高さは7メートル。
- c4 上手側に1.8メートル×7.2メートル  
下手側に6畳大の空間有り。
- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 あり。下手の袖は、楽屋にもなる。また2階に楽屋空間あり。
- d6 なし。
- d7 ブリッジ2本あり。
- e1 客席後部に階段席を作り、通常100人。
- e2 フラットワンフロアだが、後部に階段式客席を作る。
- f 空間は全体として余裕があり、充分活用しきっていない。  
シェークスピアを長年上演してきたので、140着の衣装を貸し出せる。
- g 全日1万2,000円。入場料を取る場合、2割増し。  
詳しくは別紙「劇団名芸稽古場使用のきまり」参照。  
なお宿泊（pm9:00-am8:00）が出来、布団台含めて一人800円。

06-1 1980年12月

06-2 なし。

06-3 劇団創立当初は、南区の栗木英章氏の庭にアトリエを作り、そこで公演を行ったこともある。旧アトリエは、現在同氏の住居になっている。現地調査も行い、栗木氏のインタビューも録音してある。

06-4 なし。

06-5 なし。

07-1 ほとんどが劇団「名芸」のオリジナル公演。その上演史は別途に調査予定あり。

07-2 基本的に劇団の稽古場であり、上演の場である。

07-3 地域の団体、例えば学童保育などが主催した「むすび座」の公演、「ひらき座」の練習や、「平演会」の上演、「ケプラー40」の上演、名城大学「獅子」、名大などの大学演劇部の公演があった。

07-4 劇団名芸の旗揚げ公演「ウインザーの陽気な女房たち」、創作劇「夜明けの機関車」、長いシェークスピア劇上演史の中の「リア王」、最近では創作劇「夢家族」がある。

07-5 栗木氏の12回にわたる連載記事「南の芝居小屋から」（毎日新聞夕刊）

栗木氏の創作劇台本（入手）。No. (012-07-5)

「劇団名芸稽古場使用のきまり」（入手）。No. (012-07-5)



[013]

- 01 今池ガスホール
- 02-1 〒464 名古屋市千種区今池1-8-8 今池ガスビル9、10F
- 02-2 (052) 732-3211
- 03-1 地域文化の向上及び貢献（発表の場を）。
- 03-2 不明。
- 03-3 稼働率の維持及び向上。
- 04 7F・9F・10F  
持主 東邦ガス  
管理委託 邦和土地建物
- 05-1 別紙 No. (013-05-1)
- 05-2 設計者 日本設計  
施工会社 鹿島建設・竹中建設JV、ただし、照明は松下電工、音響は東亜特殊電気が施行。
- 05-3 別紙 No. (013-05-3)
- 05-4-a1 不明。
- a2 別紙 No. (013-05-4-a2)
- b1 別紙 No. (013-05-4-a2)
- b2 空席時1.2。
- c1 固定型。
- c2 間口11.8m 奥行き6.7m。
- c3 80cm。
- d1 無。
- d2 無。
- d3 所作台他別紙の通り 別紙 No. (05-4-a2)
- d4 無。
- d5 有（控室）。
- d6 無。
- e1 0～356。
- e2 ワンスロープ型。
- f 可動式移動席。
- g 別紙 No. (008-05-4-g)
- 06-1 1986. 3. 19 こけら落とし（記念パーティー＋舞台開き：御祝儀舞踊）
- 07-2 貸ホールのため自主公演等は無。
- 07-3 ピアノ等の発表会。

- 07-4 無。
- 07-5 ホール稼働情況
- 開館年 50% (年平均)
- 2年目 60%
- 3年目 70%
- 内容内訳: 60～65% 発表会  
20% 講演会  
15～20% 東邦ガス内部での勉強会

◆ ————— ◆

[014]

- 01 猪子石創造文化会館 (うりんこ劇場)
- 02-1 〒465 名古屋市名東区八前1-112
- 02-2 (052) 772-1882
- 03-1 地域に根づいた文化的諸活動の拠点としての場を提供すること。「広場」として地域住民に開かれた劇場をつくること。
- 03-2 「児童演劇」が未だ市民権を得るに至っていないこと。
- 03-3 出版事業 (とりわけ子供文化に関するもの) を行うこと。今後とも地域文化の核になること (場合によっては、地域住民がここでの活動の中に入り込み、その後、ここを出て、自分たちの場へ戻っていくといったことがあってもよいと考えている)。映画会の開催。
- 04-1 (株)猪子石創造文化会館 (その中に劇場委員会を置き、運営にあっている)。
- 05-1 外部写真あり。No. (014-05-1)
- 05-2 鈴木隆三設計事務所 (プランは自分たちで考える)。杉本組。
- 05-3 平面・立面図あり。No. (014-05-3)
- 05-4-a1 2kW×48回路。
- a2 マントリックス調光卓 (フェーダー36本、4シーンプリセット又は44シーンメモリー可能)、アッパーホリゾントライト (ハロゲンランプ3回路、各12灯)、350Wクセノピンスポット1台。
- a3 なし。
- b1 ミキサー (16ch、4出力)、移動可能のスピーカー4台。
- b2 不明。
- c1 自由移動型 (従来の既成舞台にとらわれず、何もない演劇空間をつくろうとした)。
- c2 間口10.6m、奥行7.2m。
- c3 不明 (2階まで吹き抜けになっている)。
- c4 なし。

- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 あり（1室）。
- d6 なし。
- d7 リハーサル室（合宿をすることも可能）1室。シャワールーム1室。録音室（非常に良質のもので、他所に依頼せずに、ここでミキシングなど可能）1室。その他に会議室1と書庫1がある。
- e1 178席（子供を入れると最大200席）。
- e2 客席は6段のヒナ段式になっていて、使用しないとき、あるいは、客席と舞台とを同一平面にしたいとき、収納することができる。
- f なし。
- g 別紙参照。No. (014-05-4-g)  
平日全日 30,000 円、土日祭日全日 40,000 円。
- 06-1 昭和61年4月
- 06-2 なし。
- 06-3 なし。
- 06-4 なし。
- 06-5 「劇団うりんこ」の稽古場を取りこわして建設。一般市民からも資金をあおぎ、出資者には毎年利息を支払っている。「劇団うりんこ」は現在この会館に家賃を払って利用している。
- 07-1 次つぎと創作作品を上演する一方、劇づくり講座、うりんこ音楽広場、劇団うりんこのアトリエ公演、人形劇、講演会などを行っている。
- 昭和61年 小田健也脚色・演出「歌芝居、じゅごんの子守歌」  
別役実作「不思議の国のアリスの帽子屋さんのお茶の会」
- 昭和62年 谷川俊太郎作「いつだって今だもん」  
小田健也脚色・演出「ガンバとカワウソの冒険・冒険者たちパートⅡ」  
中村欽一原作、ふじたあさや潤色演出「やけあとのブレーメン楽団」  
小谷野洋子構成演出「らりぱっぶらりぱっぶ」
- 昭和63年 加藤直構成演出「宮澤賢治大運動会」  
世界人形劇フェスティバル'88 イン名古屋で、フランスのヴェロ・テアトルと韓国の男寺党の公演  
北村想作、小谷野洋子演出「BUDORI——眠れぬ夏の月」など。
- 劇団うりんこ発行のパンフレットに劇団発足以来の上演史が簡単にまとめられている。  
No. (014-07-1)

- 07-2 劇団うりんこの企画制作（アトリエ公演・付属研究所公演などを含む）。
- 07-3 劇団うりんこの他、大学生・アマチュア劇団、ママさんコーラス、学校の公演、さまざまな形態の発表会などに利用されている。公演を観にくる人は歩いてこられる距離の地域住民（親子連れ）が多い。
- 07-4 多数。
- 07-5 劇団うりんこは公演を通して年間45万人の子供たちと接触している。劇団うりんこの公演では、入場料の上限を2,000円（普段は800～1,500円、平均すると1,300円）とし、子供・大人同一料金制をとっている。地域住民が自宅での夕食を済ませてから来られるように夜は7時開演ということにしている。

◆ ————— ◆  
〔015〕

01 名古屋港湾会館

02-1 〒455 名古屋市港区入船2-1-17

02-2 (052) 652-7151

03-1 港湾関係者・船員をはじめ地域住民の利用を目的として設立。運営にあたっては、福祉文化の向上に役立つことを念願すると同時に、その管理にあたっては、民主的かつ効率的に運営する。

03-2 地理的位置の関係から、利用者に不便と思われる。

03-3 港、と聞いただけで、名古屋のはずれの遠い所というイメージを持つ人が多いので、それほど遠いところではないし、駐車場のスペースも充分にあるなどの宣伝活動と会館のイメージアップに努めたい。改装時に、音楽設備・照明設備を充実したので、音楽関係・演劇関係の方々の利用を期待している。

04 財団法人 名古屋港文化センターが名古屋港湾管理組合から委託され運営している。

05-1 外部写真あり。No. (015-05-1-①) 会館発行のパンフレットにも外部及び内部写真あり。No. (015-05-1-②)

05-2 不明。

05-3 会館発行のパンフレットに図面あり。No. (015-05-3)

05-4-a1 電子クロスバー装置 CRT 方式。

a2 ボーダーライト2列、フットライト1列、サスペンションライト2列、 Horizont ライト上下一列、センターピンスポットライト2kW×2。

a3 なし。

b1 調整卓マイク・ライン入力24回路、増幅器24台出力3320W、プロセニウムスピーカー3台、サイドスピーカー2台、移動用ステージスピーカー2台、レコードプレーヤー2台、エレベーターマイク1基、ワイヤレスマイク4ch、三点吊マイク1基、

テープレコーダー2台、カセットデッキ2台、CDプレーヤー1台。

- b2 残響付加装置。
  - c1 固定型。
  - c2 間口16.5 m、奥行10 m。
  - c3 7 m。
  - c4 不明。
  - d1 なし。
  - d2 なし。
  - d3 なし。
  - d4 なし。
  - d5 洋室2、和室2。
  - d6 上手、下手花道各1.5 m×6.0 m。
  - d7 シャワー室2。
  - e1 808席（固定席805、車椅子席3）。
  - e2 ワンスロープ型
  - f なし。
  - g 別紙参照。No. (015-05-4-g)  
平日の全日入場無料の時93,100円、有料の時140,000円  
土日祭日の全日 入場無料の時115,000円、有料の時172,000円。
- 06-1 昭和46年3月29日。
  - 06-2 なし。
  - 06-3 なし。
  - 06-4 なし。
  - 06-5 昭和63年ホールの内部を改装。
  - 04-1 不明。
  - 07-2 自主事業はなし。
  - 07-3 62年度の利用総計によると、民舞謡33.4%、音楽16.6%、講習・研修12.6%、労働組合11.3%、式典7.9%、演芸・演劇6.6%、講演会5%、会議3.6%、その他3%である。
  - 07-4 不明。
  - 07-5 会館発行のパンフレットあり。No. (015-07-5)

[016]

- 01 名古屋市芸術創造センター
- 02-1 〒461 名古屋市東区葵1-3-27
- 02-2 (052) 931-1811
- 03-1 芸術文化の創造及び芸術文化の交流の場を名古屋市民に提供するとともに、芸術文化に関する情報資料の供用等を行うことにより、名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを目的として設置された。
- 名古屋市の芸術文化創造の中心的施設とする為、次の三点の機能を備えるようにした。①企画から練習、発表まで一貫してできる施設とすること。②文化団体、専門家、市民が相互に交流できる施設とすること。③芸術文化に関する情報・資料を収集、提供できる施設とすること。
- 03-2 なし。
- 03-3 市民の積極的、自主的な文化活動の一層の促進と機会の充実に努めること。国際交流事業の実施により、国際親善と相互理解を深めること。
- 04 財団法人名古屋文化振興事業団（理事長 亀山巖）が、名古屋市から委託を受けて管理している。
- 同法人は、名古屋市民の文化・芸術の振興に資する事業を行い、個性豊かな魅力ある市民文化の創造に寄与することを目的として、昭和58年7月1日に設立された法人で、役員は理事15名及び監事2名。理事会の諮問機関として34名から成る評議員会と、理事長の諮問機関として専門委員会とがある。職員は14名。
- 05-1 外部写真あり。No. (016-05-1-①) センター発行のパンフレットにも外部・内部写真あり。No. (016-15-1-②)
- 05-2 建設にあたって公開の設計競技を実施した。名城大学安藤洋教室の設計を採用。
- 05-3 センター発行のパンフレットに図面あり。No. (016-05-3)
- 05-4-a1 調光装置サイリスター方式186回路、調光容量500kVA。
- a2 照明用バトン（6本、内電動2本客迫り天井内）、シーリングスポットライト（2列）、フロントサイドスポットライト（2段対）、センターピンスポットライト（3本）。
- a3 なし。
- b1 増巾器総出力1800W。調整卓16入力。反響板。
- b2 不明。
- c1 可動プロセニアム。
- c2 間口15m～18m、奥行11m。
- c3 8.6m～6m。
- c4 不明。
- d1 なし。

- d2 大2基、小1基。
- d3 客席迫り2基。
- d4 不明。
- d5 大2室、小3室。
- d6 なし。
- d7 リハーサル室(310㎡)1室、練習室(各86㎡)、シャワー設備あり。
- e1 640席(1階490席——客席迫り上88席を含む)——、2階150席)。
- e2 スロープフロアと階上席。
- f なし。
- g 別紙参照。No. (016-05-4-g)

芸術文化活動に使用する場合	平日の全日	105,000円。
	土日祝日の全日	130,000円。
その他の場合	平日の全日	126,000円。
	土日祝日の全日	157,000円。

- 06-1 昭和58年11月3日。
- 06-2 なし。
- 06-2 なし。
- 06-3 なし。
- 06-4 なし。
- 06-5 なし。
- 07-1 『なごや文化情報』に毎月の催物案内が掲載されている。
- 07-2 自主文化事業を行っている(1. 総合舞台公演 2. 作曲・戯曲・評論の創作作品募集 3. 名古屋文化振興賞の授賞 4. 名古屋文化振興受賞作品の上演 5. 美術展 6. 文化情報誌『なごや文化情報』の刊行など)。
- 07-3 昭和62年度の利用統計によると、利用率は日数にして98.7%、単位数(午前・午後・夜間)にして94.9%であり、種目別にみると、音楽46.6%、演劇17.2%、舞踊7.8%、バレエ4.4%、オペラ2.5%、映画1.9%、その他19.6%となっている。
- 07-4 不明。
- 07-5 大会議室(84㎡、36名用)1室、中会議室(35㎡、16名用)1室、小会議室(17㎡、12名用; 20㎡、10名用; 18㎡、10名用)3室あり。現在の蔵書数1100冊。管理係長とのインタビューテープあり。No. (016-07-5)

[017]

01 名古屋市公会堂

02-1 〒466 名古屋市昭和区鶴舞1-1-3

02-2 (052) 731-7191

03-1 昭和天皇の成婚を祝い、名古屋市の記念行事として建設された。昭和31年に制定された「名古屋市公会堂条例」第一条には、「市民文化の向上及び住民福祉の増進を図るため、次のように公会堂を設置する」とある。

03-2 不明。

03-3 不明。

04 発足当時は名古屋市総務局の管理下にあったが、昭和39年には名古屋市教育委員会に、昭和47年には市民局に所管が移され、現在に至っている。

05-1 外部写真あり。No. (017-05-1-①)。名古屋市公会堂発行(昭和8年5月)の『名古屋市公会堂』と名古屋市民局発行(昭和55年10月)の『半世紀のあゆみ——名古屋市公会堂』の中に写真多数あり。No. (017-05-1-②、③)。

05-2 設計は武田五一氏ら6名。施工は大林組など16社。

05-3 公会堂から図面が発行されている。No. (017-05-3)。

05-4-a1 LH4色8回路、UH4色8回路、フットライト4色4回路、BSus12回路、ISus12回路、2Sus12回路、1Bo4色8回路、2Bo4色8回路。

a2 第1、第2ボーダーライト、 Horizontライト、シーリングスポットライト、フットライト、アワースポットライト、ギャラリースポットライト、フロントスポットライト、第1～第3サスペンションライト、スポットライト500W30台・1kW16台、ステージスポットライト1kW8台。

a3 なし。

b1 拡声装置2760W(マイク回路8)。テープレコーダー4台、レコードプレーヤー1台、ワイヤレスマイク4ch、エレベーターマイク2基。

b2 不明。

c1 固定式。

c2 間口15.2m、奥行10.0m。

c3 5.4m。

c4 不明。

d1 なし。

d3 なし。

d4 不明。

d5 楽屋2室、控室2室。

d6 なし。



- d7 浴室あり。公会堂内には、その他に、ホール（780名）1、集会室7、和室1、特別室1あり。
- e1 2,000席（1階986席、2階562席、3階452席）。
- e2 スロープフロアと階上席。
- f なし。
- g 別紙参照。No（017-05-4-g）。

無料又は入場料の最高額が1,000円以下のとき、

平日全日 192,000円。

土日曜等全日 240,000円。

入場料の最高額が1,001円～3,000円のとき、

平日全日 249,600円。

土日曜等全日 312,000円。

入場料の最高額が3,001円以上のとき、

平日全日 326,400円。

土日曜等全日 408,000円。

06-1 昭和5年9月30日。

『名古屋市公会堂』の沿革には「今上陛下御成婚記念事業トシテ大正十三年一月本公会堂建設ノコトニ定マリ大正十四年三月之ガ建設財源ヲ元市有地賣却代金及一般篤志家ヨリ寄附金ヲ募集シ繼續費豫算・決議ヲ經鶴舞公園内ニ地ヲトシ昭和二年三月十五日地鎮祭ヲ行ヒ昭和二年四月二日工事ニ着手シ昭和五年九月三十日ヲ以テ工事竣工ヲ遂ゲ市制記念日タル五年十月十日開館式ヲ舉行シタリ」とある。

この公会堂は、座席数2,700（予備椅子を入れると3,000人収容可）の大集会室を始め、小集会室等20有余を有し、建坪783坪、延坪3,561坪の近代復興様式の鉄骨・鉄筋コンクリート造り、地階を入れて5階建の建物で、当時としては、東京の日比谷公会堂と並ぶ、日本有数の大公会堂であった。

06-2 昭和55年9月30日。

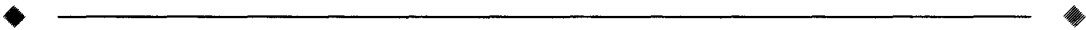
建設当初、東洋一の文化の殿堂と謳われ、名古屋地区唯一の施設として、市民文化の向上と住民福祉の増進に寄与してきたが、建設後、半世紀を経て、建物や附属設備などの老朽化が著しく、その機能を十分発揮することができなくなり、また、大ホールの利用については、演出方法の多様化により、これまでの機構では、満足できなくなった。消防法の改正に伴う設備改修が必要になったこともあり、昭和54.55両年度で改修工事を進めることになり、ここに、公会堂の改修工事が、市制90周年記念事業の一環として実施された。55年10月1日の市制記念日に記念式典が挙げられた。

06-3 なし。

06-4 戦時中は防空隊司令部が置かれていた。戦後は、昭和20年9月26日より米軍に接收され、

講和条約締結後も引き続き、米国空軍の厚生施設となり、その機能が十余年に亘り、停止した。その後、市民や文化事業関係者の熱烈な要望により、昭和31年に名古屋市に返還された。

- 06-5 なし。
- 07-1 多数。『名古屋市公会堂』には、開館後2年半の間にこの公会堂を利用した主な関係者が列挙されている。『半世紀のあゆみ』には、戦後の主な催物が記載されている。
- 07-2 なし。
- 07-3 『半世紀のあゆみ』に昭和5年～昭和16年、昭和37年～昭和54年までの利用総計表が載せられている。たとえば、昭和6年の統計によると、集会が44.9%、展覧会及び見本市が18%、宴会が13.9%、結婚式及び披露宴会が5.9%、講演会・演説会が5.0%、映画会・音楽会が4.1%、舞踊会が1.6%、その他6.8%である。昭和62年は、講演・式典が33.6%、歌謡ショーが25.7%、学校行事が15.4%、音楽会が6.9%、演劇が4.1%、映画が4.1%、舞踊1.3%、その他が8.9%である。利用回数は605回で、利用率は70.5%となっている。
- 07-4 不明。
- 07-5 『名古屋市公会堂』（名古屋市公会堂、昭和8年5月8日発行）と『半世紀のあゆみ——名古屋市公会堂』（名古屋市公会堂管理事務所編集、名古屋市市民局発行、昭和55年10月1日）がある。



[018]

- 01 **名古屋市民会館**
- 02-1 〒460 名古屋市中区金山1-5-1
- 02-2 (052) 331-2141 (代)
- 03-1 芸術文化の振興と市民福祉の向上 参照「名古屋市民会館概要」  
市民の方々の発表の場を  
海外のアーティストを名古屋へ  
大ホール…国際会議・学会会議・オペラ：結果的に軽音楽多い  
中ホール…日舞・演劇、学生定期演奏会：々 学生定期〃
- 03-2 3000人入るホールがほしい  
小ホールがあればより良かった。
- 03-3 03-1 参照
- 04 財団法人 名古屋市民会館管理公社（昭和47年6月1日発足）  
発足前は名古屋市市民局が窓口
- 05-1 別紙 No. (018-05-1)
- 05-2 設 計 者：(株) 日建設計・(株) 山下寿郎設計事務所

音響技術協力：NHK 総合技術研究所

施工会社：大林組他

05-3 別紙 No. (018-05-3)

05-4-a1 }  
a2 } 別紙・別図 No. (018-05-4-a)  
a3 }

b1 別紙 No. (018-05-4-b1)

b2 残響

大ホール：2.1 (空席時)、1.8 (80% 着席時)

中ホール：1.32 ( " )、1.17 ( " )

いずれも 62 年改修後、反響板使用時

「建築音響測定結果報告書 (改修前・改修後)」(株) 永田穂

建築音響設計事務所

c1 固定型。

c2 大：間口 20 m×奥行 21 m

中： " 16 m× " 21 m

c3 大：11.5 m

中：7.2 m

c4 大：20 m×20 m×2

中：14 m×20 m×2

d1 有 (中ホールのみ)

d2 有 大：2 基

中：4 基

d3 スッポン (中ホールのみ)。

d4 有。

d5 有。

d6 有 (中ホールのみ)。

d7 鳥屋 (とや) (中ホール)、オーケストラ・ピット、リハーサル室、衣裳室

e1 大：2101～2311

中：1056～1158

e2 階上席あり。

f 大ホール：音響効果良好…名古屋市建築局が NHK 技術総合センターに依頼

g 別紙 No. (018-05-4-g)

06-1 昭和 47 年 10 月 1 日オープン (S 38 年 12 月企画 39 年市より予算計上)

07-2 主体的企画 (自主文化事業)：貸しホールと競合しない形で…勤労者、主婦、アマチュアを

対象・伝統芸能、あまり一般に興行されないものを。名前：「市民の劇場」

芸術祭主催公演（文化庁の芸術祭執行委員会から市民会館が請負う契約の形をとる。内容については市民会館も協議。）

参照「名古屋市民会館概要」 P 26～

文化課で企画（文化事業委員会の意見参考：モニター任期1年）

07-3 「名古屋市民会館概要」他

07-4 〈道成寺の世界〉：昭和59-60年

各流派の横のつながりを作ることができた（名古屋以外にも）。

中央からも認められた。マスコミの評判も高かった。

〈バフチサライの泉〉（地元バレエ団合同公演：芸術祭主催公演）

男性群舞に演劇関係者を起用・成功。

企画の際専門家（邦楽協会 etc.）に諮る

〔019〕

01 **七ツ寺共同スタジオ**

02-1 〒460 名古屋市中区2-27-20

02-2 (052) 221-8646

03-1 現在スタジオの小屋主である二村氏は、大学を卒業してから故郷の名古屋に戻ってきて、名古屋タイムズの新聞記者となった。好きな演劇に係われる文化部の所属になり、交友を広げた。大学時代からアジールとしての都市空間に関心があったが、記事を集めながら巡り会った人々と大須に「小屋」を作ることになった。大須という町は彼らによって選ばれるべくして選ばれた。

昔の大須地区には、「馬芝居」というものがあった。それは『馬芝居の研究』に詳しい。生きた馬を使った合戦の再現で観衆を集めて賑わっていたという。スタジオの名前の由来である大須に現存する七つ寺は、昔、大須観音以上に人を集めていた。五重の塔があり、池があり、縁日では広場の観を呈していた。自由民権運動時代ではこの地区が密談の場所になっていた。町は第2次大戦の戦災で焼けてしまうが、それでも戦後、アジールみたいな場所として存在した。泥棒市が開かれもした。しかし戦後の流れの中で戦前に比べて著しく賑わいを失ってしまう。彼らはその空間に自由に表現できる人間のアジールを復活したいと願った。それは1970年を迎えようとしていた当時の日本の都市の自然な反応でもあったろう。彼らは往年の賑わいをイメージしたが、歌舞伎小屋を造るのではなく、近代的に、可変的な何もない空間を求めた。最初8人の発起人がいた。「共同スタジオを開いた原動力は、自由な表現空間がほしい、——夜遅くまで使え、自炊合宿も出来る共有空間を——そんな願望をもっていた演劇、自主上映などにかかわる多くの熱意が実ったものだ。」

(二村氏の記事より)

それから元名城大の池田氏が中心となって大須町人祭りを興した。その成果は大きい。その後は、「スーパーロック歌舞伎」がリーダーシップを担う。

当初、七つ寺の名前を拝借しているのに了解を得なかったから、後でひどく叱られた。今では理解されているが、当時、協力を求めても理解されなかったであろうと、二村氏は言う。他方、理解されないのはおかしいと彼が考えた所に、当時の時代に対する彼の文明批判が出ている。寺は、本来彼が行うような活動を保障する役割があったはずだと考えるからである。

- 03-2 「発足以来、運営メンバー、公演劇団の変転はあるものの、15年間1つの拠点として持続された。フォーク、集会公演などにも利用され、これまでの総公演数、約650。自主的管理、無資本、非営利の原則を貫き、公的援助にも頼らず維持できているのは全国的にも珍しいとされている。」(同上)。二村氏の自信は事実によって証明されている。スタジオの果たした役割は大きいものがあった。
- 03-3 二村氏は1987年7月にスタジオ15周年記念公演を成功させ、今後とも次なる世代に継承させたいと願っている。「あいかわらずスタジオは貧乏暮らしだ。一方、演劇がブームや銭儲けになりやすい時代でもある。見せかけの成熟の時代。そんな時代にこそ、みずからの生き様をきっぱり抗させ、みずえることのできる新しい演劇人のよりどころとして、スタジオは、これからも何もない空間——風通しのよいがらん堂であり続けたい。」
- 04 小屋主二村利之氏の個人経営。ただし土地及び元倉庫としての建築物は所有者が別にいる。その人物の理解あって初めて成り立っている演劇空間である。「自主的管理、無資本、非営利の原則を貫き、公的援助にも頼らず維持できている。」(二村氏記事「七つ寺共同スタジオの15年 —1—」より)
- 05-1 有り。No. (019-05-1)
- 05-2 元倉庫なので、内部空間のレイアウトを二村氏が行った。
- 05-3 なし。
- 05-4-a1 不明
- a2 スポットライト 50台
- a3 とくになし。
- b1 不明。
- b2 不明。
- c1 自由移動型。ただし最近では空間奥に舞台が固定する傾向がある。
- c2 ホール空間として約100平方メートルがあり、舞台空間は狭くも広くもなる。
- c3 5メートル
- c4 袖としての専用空間はない。
- d1 なし。

- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 2階にあり。
- d6 なし。
- e1 通常100人位と思われるが、最大200人は入れている実績がある。
- e2 ワンフラットフロア。
- f とくになし。
- g 全日3万円。仕込1万円。

06-1 1972年9月

06-2 長い歳月をかけて施設や設備を改善してきた。

06-3 なし。

06-4 発起人は8名いたが、現在は二村氏一人が面倒みている。

06-5 とくになし。

07-1 柿落しは1972年9月、「演劇団」(流山児主催)の「夢の肉弾三勇士」

同年12月には、つかこうへいとその劇団「暫」が、「郵便屋さんちょっと」から次々に「初級革命講座——飛竜伝」「熱海殺人事件」をあいついで上演。

スタジオ開場まもなく北村想氏が協力を申し出る。

1982年の彗星'86発足まで、同スタジオの看板劇団。彼の劇団の旗揚げが1973年3月、中京大学「劇団いかづち」OBを集めて、「演劇師団」を結成、「哀愁列車——喫茶店は燃えているか。」

その活躍は、「猫飛遊俠伝・玄海無法松」「二十五の銀」「林檎年代記」などと続く。「T・P・O師★団」と名前を変え、「風の中の少女」「月夜とオルガン」「RAブルース」「虎・ハリマオ」

当時、名古屋の小劇場運動の大きな流れをリードした「演劇衆・紅蓮都市」の活躍の場ともなった。

北村の彗星は、1986年共同スタジオを離れ、鈴蘭南座など別の上演空間を求めた。

同劇団の主演女優であった火田恭子は、独立し、ハヤシクラブをつくった(1983年)。さらに名古屋クセック(1980年旗揚げ)、そして「少年王者館」(1982年旗揚げ)が競うように活躍する。

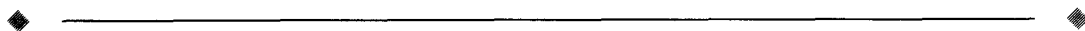
他方、連続講演会「女寺小屋」が1973年6回開かれている。当時のウーマンリブ運動の反映で、講師陣には樋口恵子、河野信子、水田珠枝の各氏が残っている。

映画の上映もある。高度消費社会の落し子、寄せ場の労働者の闘いを描いた記録映画(小川紳介監督)。

07-2 自由なる空間としてのスタジオだから、利用者が呼んできたり、また東西の劇団がそれを

知って上演場所として選んでやってきた。それが上記の歩みである。

- 07-3 商業ベースの劇団や、新劇御三家、地元の新劇グループは上演しない。  
一言で言えば、60年代から頭角を現したいわゆるアンダーグラウンド演劇集団が主たる利用者であった。今でも同じ流れであるが、小劇場集団も性格を変えてきているので、単に実験劇場的上演ではなく、ショー性の高い大阪の「南河内万歳一座」、東京の「WAHHAHA 本舗」など、マイナーから中堅所が登場もしている。最近では文学座の若手グループの「エチュード」上演もあった。
- 07-4 07-1 で列挙した作品が二村氏の記憶に残るものである。
- 07-5 二村氏の記事（毎日新聞夕刊）： 七つ寺共同スタジオの10周年記念のとき、10回連載（未入手）。  
（なお、同スタジオに縁の深い北村想の連載もあった。毎日新聞の樋口氏担当で、当時の主だった演劇人が執筆している。シアター・ウィークエンドの松本氏のものは入手済み）



〔020〕

- 01 誓願寺
- 02-1 〒458 緑区鳴海根古屋
- 02-2 (052) 621-3522
- 03-1 名鉄の「鳴海」駅から近いという地の利もあって会場として利用希望があるので貸している。
- 03-2 なし。
- 03-3 なし。
- 04 寺の本堂内部を貸しているが、寺の宗教活動の一貫としてであるから貸し小屋として経営しているわけではない。
- 05-1 写真あり。No. (020-05-1)
- 05-2 不明。
- 05-3 不明。
- 05-4-a 1 個人の家のような通常の電力使用しか出来ない。  
a 2 なし。  
b 1 なし。  
b 2 PA は周囲の住宅に迷惑がかかるので使用できない。  
c 1 自由移動型。  
c 2 利用可能な空間として横7間×縦10間がある。ただし柱が6本ある。  
c 3 不明。  
c 4 自由移動型のため、自由に設定できる。

- d1 寺の本堂であるため、なし。
- d2 同上。
- d3 同上。
- d4 同上。
- d5 同上。
- d6 同上。
- d7 同上。
- e1 不明だが、寺の本堂であるから2、3百名は収容出来る。
- e2 フラット。畳敷。
- f とくになし。

06-1 不明。

06-2 不明。

06-3 なし。

06-4 なし。

06-5 とくになし。

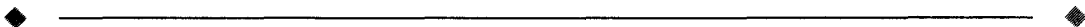
07-1 「心に海をもつ男」(松橋勇蔵作、愚安亭遊佐一人芝居): 下北半島の六カ所村の核燃料基地をテーマに反原発をテーマとして持っている作品。作演出自演の彼は、この他に「人生一発勝負」「百年語り」を上演している。

07-2 寺の傾向として市民運動に理解があり、その一貫として上記の上演がある。

07-3 劇の公演は殆どない。市民運動の一貫として上演形態が寺の本堂で可能な時のみ使用している。

07-4 なし。

07-5 とくになし。



{021}

01 **スタジオ・ルンデ**

02-1 〒460 名古屋市中区丸の内2-16-7

02-2 (052) 203-4188

03-1 室内楽を演奏するのにもっともふさわしい空間がほしかった。

音楽の演奏だけを考えたホールが(少なくとも設立時の名古屋には)なかった。

演奏する立場と聴く立場と両方に立って…室内楽の演奏会が極めて少なかった。名古屋ではきまりきったプログラムしか演奏されないし、いれものもない。→自分でいれもの(演奏会場)を作り、企画を。

03-2 例会の採算性を良くしたい。



- 03-3 方針 or 希望…音楽界の環境の問題を改善してゆきたい：  
 ・大きなホールの方が良いという考えがある；大がかりなものの方が良い、格が上という  
 考え  
 ・音楽的・音響的条件よりもまず、安い会場を探す印刷物他にお金をかける  
 ・コンサートの成立ちの区別がはっきりしていない；主催者が“仕入れて売って”いるの  
 かそうでないのかの区別…プロとアマチュアの区別がついていない。…演奏家が生活で  
 きない
- 04 個人経営：鈴木詢氏（「ルンデの会」主宰）  
 正会員（出資者：20人余り）  
 収入：① 会員450名月額1名500円  
 ② 貸しホール（会員制）  
 ③ 例会の会費（入場料）  
 ④ マネジメント委託業務（会員対象1件2万5千円）
- 05-1 別紙 No.（021-05-1）
- 05-2 設計者：松岡設計事務所（音響設計は鈴木氏と協同設計）  
 施工会社：海津建設
- 05-3 別紙 No.（021-05-3）
- 05-4-a1 不明。
- a2 固定・無色白熱燈  
 スポット4基、サス4、ステージ上スポット4、地明り、調光可。（以上白熱燈）、客  
 席も白熱燈。若尾照明。別紙
- b1 別紙（アコースティックな演奏会が主体のため、簡単な場内放送設備の他特にPA装  
 置は無し）講演台（スピーカ付）。  
 録音機材その他は別紙
- b2 残響：空席時1.44秒（周波数帯の低高までほぼ均一）  
 弦の室内楽がターゲット：柔らかく暖かみのある音+程よい分離・混合。絶対音量の  
 少ない楽器の音を生かす。  
 ピアノでは音色の変化。演奏者の納得のいく会場を。
- c1 固定型 プロセニウム型（に見える）
- c2 7.5 m×4 m
- c3 20 cm（客席後部の高さと同じ。エプロンステージも付けられる。）天井高：アーチ部  
 3,300 cm～客席最高部4,100 cm
- c4 無。
- d1 無。
- d2 無。

- d3 無。
  - d4 無。
  - d5 有（控室）。
  - d6 無。
  - e1 0～180（移動席）。
  - e2 フラットフロア。
  - f ステージから客席まで天井は反響板構造（角度半可変）  
ステージ背面と側面、客席側面前半分が深さ 10 mmレンガタイル張り客席の後半分クロス張り  
天井・床は木
  - g 別紙 No. (021-05-4-g)
- 06-1 1981年4月25日おひろめ、5月1日オープン
  - 07-2 ルンデ主催のコンサートが年60回以上（全体の半分）  
クラシック、現代音楽、ジャズ、ポピュラー、邦楽 etc.  
例会企画の記録あり。
  - 07-3 貸しホールのクラシックの20%が演奏会、80%が発表会世界初演もの、ユニークなシリーズもの多し
  - 07-4 お客さんに決めて頂きたい  
ラサール・カルテット ベルク 100年記念：1986 叙情組曲解説の講演つき。  
バルトーク・カルテット公開レッスン：1986  
T・ニコライエワ（pf）ショスタコヴィチについて講演  
（肉声での話の効果大きい）
  - 07-5 演奏会の休憩時間にコーヒー・ブレイクあり  
会員制〈ルンデの会〉：例会コンサート月5、会報月1

◆ ◆  
[022]

- 01 スタジオ高針（現 高針テアトル西友）
- 02-1 〒465 名古屋市名東区牧野里-401
- 02-2 (052) 704-3030
- 03-1 基本スタンスとして残っている資料によると、街の中におけるスタジオ高針の基本的位置づけとして「新日常生活文化の情報発信及び集約の拠点」とされていた。つまり街作りのコアとしての機能を主体側では希望している。  
また小売業界での中京地区での高針店の独自性とイメージ醸成のため。名古屋にはその他に御器所店があるが、そこの催し物ホールでは芝居などは上演しない。参考までに春日

- 井の西武にドライブイン・シアターがある。
- 03-2 地元密着という路線とセゾングループの情報発信という路線がうまくかみ合わないという悩みがある。東京で仕込んだイベントだと、それはそれで受けるのだけれど、でも実際にはここに来るお客さんに合わせると、人形劇になってしまう。ギャップが大きい。屋上でやるイベントにぬいぐるみショーがあるが、お客さんは集まってくる。
- 人事移動が激しく、当初3人いたスタッフはいつのまにか一人になってしまったという事実がある。かつてスタジオ課があったが、サービス課そしていまは販売促進課になった。僅か2、3年のことである。高針店の内部の討論からそうなったもので、予算は段々減ってきている。現在、映画館として再スタートする運びとなった。そうなったのは当初の予定通りに行かなかったからで、計画は立てるが、結果について十分検討出来ないままに終わっている。
- 守備範囲としては北は守山、東は日進、南は天白が商圈と考えている。三越デパート屋ヶ丘に三越劇場があるが、ダイエー「メイトピア」やユーストアなどのスーパーが競合相手であり、三越は奥様だけを対象、こちらは子供も含むという違いがある。色々試行錯誤を重ねてきたが、明確な展望のないまま今日に至り、この店の上部に中京地区事業部があり、そこが映画館にする方針を出したため模様替えを行なうことになっている。
- 一時「西友コミュニティ・カレッジ・スタジオ高針」という名前があった。それはカルチャ・センターの発表の場の意味もあったからであるが、そうしたものと有機的にうまく運営できなかったことも方針の変更の背景にある。
- 03-3 レンタル劇場としては地の利が悪い。劇場として頑張りきれなかったが、コミュニケーションスペースとしては維持したい。
- 04 株式会社西友「高針店」経営
- 05-1 有り。No. (022-05-1)
- 05-2 不明。
- 05-3 有り。(100分の1のレイアウト図) No. (022-05-3)
- 05-4-a1 不明。
- a2 500 W×6
- a3 とくになし。
- b1 当初はモノラルだった。今はビクターの4チャンネル。
- b2 悪いが、少人数の観客しか収容出来ないのも特に問題はない。
- c1 自由移動型。
- c2 自由。
- c3 2.9メートル
- c4 なし。
- d1 なし。

- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 なし。
- d6 なし。
- d7 なし。
- e1 移動式で椅子 84 脚、120 人分あり（畳 1 枚で 4 人と計算し自主的に出した数字を保健所へ提出。当局の数え方はあぐらをかいたスペースで一人 40 × 40、そして通路など余裕が必要なので 120 人となっている。）  
映画専用劇場「テアトル西友」としては 80 席。
- e2 フラット。
- f 別紙参照。No (022-05-4f)
- |              |       |           |
|--------------|-------|-----------|
| 午前 10 時～12 時 | 平日    | 13,000 円  |
|              | 土日、祝日 | 25,000 円  |
| 午後 13 時～16 時 | 平日    | 21,000 円  |
|              | 土日、祝日 | 40,000 円  |
| 夜間 17 時～20 時 | 平日    | 24,000 円  |
|              | 土日、祝日 | 55,000 円  |
| 終日 10 時～20 時 | 平日    | 47,000 円  |
|              | 土日、祝日 | 100,000 円 |
- 06-1 1986 年（昭和 61 年）6 月 6 日設立  
ただし高針店自体は 1982 年から存在している。
- 06-2 1988 年 9 月 23 日映画館専門劇場として再オープン。内装を一新した。
- 06-3 なし。
- 06-4 なし。
- 06-5 なし。
- 07-1 オープン時に本部企画（セゾン・グループ）あり。別紙参照。  
岸田今日子のスライドと朗読、北村想のトークなどが組まれている。  
1987 年 4 月 3 日～5 日「万有引力」（B マリアの印象）  
1987 年 11 月 21 日～22 日「北々社中」  
1988 年 8 月「草もう社」
- 07-2 「北々社中」は、早川まさゆき氏が水野氏の友達であった。  
草もう社も今井よしみ氏から連絡があった。
- 07-3 傾向と言うほどの上演数はない。
- 07-4 とくになし。

- 07-5 支配人水野美穂さんとのインタビュー録音テープあり。水野さんのテアトル西友（映画館としての）支配人の新聞記事あり。No. (022-07-5) 彼女は金城大学住居学科卒業。1987年11月から責任者に就任。演劇人口600人説を彼女から聞く。七つ寺の二村氏の話であったかもしれないという。

[023]

- 01 **スタジオ・座・ウィークエンド**
- 02-1 〒464 名古屋市千種区春岡1-3-5 大崎ビル2F
- 02-2 (052) 762-3160
- 03-1 「座・ウィークエンドは、座付劇団シアター・ウィークエンドの拠点劇場であり、稽古の場でもある。小劇場運動の一つの形として設立された。」（以上は、設立者、劇団代表の松本喜臣氏の文）
- 03-2 経済的理由で、狭いこと。天井まで3メートルという高さでは舞台として不十分。防音効果に難があること。
- 03-3 夢の又夢だが、劇団の拠点劇場として理想的な200人劇場をもつこと。理想の劇場はオランダ、アムステルダムの「ミクリシアター」で、舞台客席が自由に設定できる。ほぼ立方体の平土間空間。松本氏のデッサンがアンケート回答用紙にある。No. (023-03-3)
- 04 劇団シアター・ウィークエンドが経営維持。
- 05-1 現地撮影写真あり。No. (023-05-1)
- 05-2 不明。
- 05-3 なし。マンションの2階廊下奥にあり、通常の部屋を劇場及びアトリエとして使用している。別紙デッサン参照。No. (023-05-3)
- 05-4-a1 6kW。20回路独立配線路。
- a2 ベビーサスペンションライト 15台  
フットライト 2台  
調光器 6回路
- a3 とくになし。
- b1 オープンデッキ 2台  
アンプ 1台  
スピーカー 2台
- b2 不明。
- c1 自由移動型。マンション内の一戸をくり抜いた空間。同じフロアには喫茶や一般店舗がある。
- c2 54.4平方メートル（横6.8×縦8）

- c3 3メートル
- c4 片側にあり。楽屋と兼用。
- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 あり。約5平米位。
- d6 なし。
- d7 なし。
- e1 50～80名
- e2 ワンフラットフロア。但し客席後方は階段式になっている。
- f 劇場並びに劇団事務所として8畳ほどの空間があり、アトリエと違ってスタジオとしての十分な機能を持っている。
- g 別紙「使用規定」参照。No. (023-05-g)  
平日(10時から21時) 3万円。 土・日 3万5千円。  
電気料(照明) 5千円。 エアコン 3千円。

06-1 1975年、劇団シアター・ウィークエンドの常打ち小屋として池下の喫茶店に喫茶劇場「座・ウィークエンド」を持つ。劇団結成語2年後であった。「今池都通り2丁目に客席50から100というフレキシブルな小劇場で、舞台空間も客席、オペレーション・ルームも楽屋もすべて合わせて90平方メートルという超ミニ劇場です。」(以上、毎日新聞夕刊の松本氏の連載記事より)

現在の劇場は、現在の所に1986年春オープン。

- 06-2 なし。
- 06-3 06-1参照
- 06-4 なし。
- 06-5 なし。
- 07-1 「一家だんらん」チラシ参照。No. (023-07-1)
- 07-2 劇団ウィークエンドの発表の場である。
- 07-3 同上
- 07-4 1988年6月上演の「漂浪」。名古屋タイムス(1988年10月24日付け)記事が示すように、都市文化奨励賞授賞のきっかけともなった。
- 07-5 劇場の上演年表は、松本氏から後日用意して頂けるとの回答あり。ただし1986年11月公演の「一家団らん」ちらし裏側に上演史あり。  
松本氏とのインタビュー録音テープ有り。No. (023-07-5)

[024]

01 鈴蘭南座

02-1 〒462 名古屋市北区大曾根1-15-3

02-2 (052) 981-6953

03-1 先代長野英吉氏が地元の人々に大衆演劇を楽しんでもらおうとして、江南から質屋の蔵を移築して創設した。

03-2 地理的位置からいうと、お年寄にはやゝ不便である。

03-3 一般の貸ホールと大衆演劇の為の常設的劇場の二本立てでいきたいが、最近は大衆演劇の客層がかなり定着してきているので、この劇場を生かす意味でも、大衆演劇を中心にやっていきたい。

04 所有者長野栄太郎氏による個人経営。

05-1 外部写真あり。No. (024-05-1)

05-2 不明。

05-3 なし。

05-4-a1 不明。

a2 不明。

a3 なし。

b1 不明。

b2 不明。

c1 固定型。

c2 間口3.5間、奥行2.5間。

c3 5間。

c4 不明。

d1 なし。

d2 なし。

d3 なし。

d4 なし。

d5 あり。

d6 左手にあり。

d7 楽屋が合宿所になることもある。

e1 すべて「桟敷式」なので、楽に座って250名、詰め込めば450名は入る。

e2 ワンフラットフローア。

f なし。

g 全日4~50,000円(古くからの常連がいるので、一律にいくらというふうには徴収していない。学生演劇などで入りの悪い時は割引くこともある)。

- 06-1 昭和29年。
- 06-2 昭和38年（入口、ホール部分増築）。
- 06-3 なし。
- 06-4 長野英吉氏（昭和52年他界）からご子息長野栄太郎氏へ変わる。
- 06-5 なし。
- 07-1 昭和29年に大衆演劇から始めたが、次第に大衆演劇が下火になり、見切りをつける。昭和47年から56年までは純粹の貸劇場となる。現在は主として大衆演劇（7つほどの劇団とつながりを持っている）を提供し、年間2ヶ月間ほど、学生・アマチュア劇用、コンサートなどに貸している。
- 07-2 現在は主として大衆演劇の為の劇団を呼ぶこと。
- 07-3 利用者として大衆演劇の劇団が多い。最近の大衆演劇の劇団の座長が若いせいもあって、若い観客が増えている。特にきれいな女形が出演する時には、若い女性や中年女性の観客が多くなる。
- 07-4 多数あるが、佐藤B作が人気が出たあとの昭和50年に、自分たちの出発点であるこの劇場で、十周年記念公演を行ったことや、泉谷しげるのコンサートなど。
- 07-5 なし。

◆ ----- ◆

[025]

- 01 滝創六ロイヤルマイム劇場
- 02-1 〒464 名古屋市千種区今池1-16-4
- 02-2 (052) 732-1415
- 03-1 演劇文化の日常性をめざして、気軽に楽しむことのできる演劇を提供する。
- 03-2 観客が一人でも、場合によっては、いなくとも、上演は行うべきとの考えを持っており、「問題」となるべきことはなかったと、主宰者の滝創六氏は言う。かつて、深夜の上演については、当局より、「法律上の規制」を受けたことがあった。
- 03-3 国際的演劇芸術家を育成すること（現在滝創六氏の門下生は8名）。その為にも、東京の劇場へもたびたび進出している。  
マイムにドラマ性をもたせること。  
リチャード三世、キリストを舞台にのせること。
- 04 滝創六氏による個人経営。
- 05-1 外部写真あり。No. (025-05-1)
- 05-2 不明。
- 05-3 なし。
- 05-4-a 1 不明。



- a2 不明。
- a3 なし。
- b1 不明。
- b2 不明。
- c1 固定型。
- c2 20 m<sup>2</sup>位（喫茶店内部、20 cmほど低くなったフロアを舞台として用いる）。
- c3 なし。
- c4 なし。
- d1 なし。
- d2 なし。
- d3 なし。
- d4 なし。
- d5 なし。
- d6 なし。
- e1 座席も固定されていないので、舞台スペース以外の空間に詰め込むとかなりの数を収容できる。
- e2 ワンフラットフロアー。
- f なし。
- g 不明。

06-1 昭和47年12月23日。

06-2 なし。

06-3 なし。

06-4 なし。

06-5 「演劇喫茶ターキー」として出発、現在は喫茶はやっていない。

滝創六氏は昭和40年に「名古屋芸術座」を創設して演劇活動に入っている。最初は狂言を取り上げ、2ヶ月に一度「新狂言劇場」で狂言を上演。その後、自作劇、ギリシャ劇、オフ・オフ・ブロードウェイの作品、不条理劇、シェイクスピア劇などと取り組んできた。昭和49年当時はここ「テアトル・ド・ターキー」で月、火を除く毎晩、公演を行った。51年には公演日を土、日に縮少し、現在に至っている。現在はマイム劇に力を注いでいる。

07-2 すべて自主企画。

07-3 客の数は必ずしも多くないが、大変真面目で熱心に観てくれる。

07-4 多数。

07-5 なし。

## 第4章 調査概要とコメント

### 1

調査者：安藤隆之

調査劇場：愛知県勤労会館

愛知県文化講堂

劇団 PH-7 アトリエ

七ツ寺共同スタジオ

スタジオ・座・ウイークエンド

スタジオ高針

誓願寺

平針小劇場

東別院青少年会館ホール

アトリエ「ゼロ」

調査年：1988年

調査方法：直接インタビューによる情報収集並びに関連資料の収集

インタビューの対象（インフォーマント）は、劇場によって異なる。公立の施設（愛知文化講堂、勤労会館）では舞台係の職員の人たちで、ホール建設の経緯は文献による説明に限られるという難点があった。なお、愛知文化講堂の舞台の調査はいまだ行っていない。従ってすべて関連資料に基づく数値であり情報である。勤労会館の場合、ホールを管理する人が専従としていて情報が得易かった。近年、合理化の波は裏方にも及び、多くの場合、下請けに委託管理に出している。また公演に際しては劇団なり、プロダクションが裏方を雇ってくるので情報が得にくい。東別院青少年会館は結婚式場も抱える会館なので劇場については歴史的事実は何うことが出来ても、舞台については委託管理を引き受けている業者の人に聞くことになった。

劇団所有の劇場（公演にも使いうる稽古場も含めて）については、劇団代表者に話を聞くことが出来た。シアター・ウイークエンドの松本氏、平針小劇場の栗木氏、PH-7の菱田氏、アトリエ「ゼロ」の長谷川氏と会った。平針小劇場については、舞台監督の人から説明があり、大変親切に教えて頂いた。またシアター・ウイークエンドの松本氏とのインタビューから、1989年度の演劇セミナーの講演を引き受けて頂いたおまけも得られた。私たちの調査は1989年度から劇団の調査も始まるので2重の意味でありがたかった。

スタジオ高針は支配人の水野氏（女性）、七つ寺スタジオは小屋主の二村氏に会うことが出来た。両氏とも親切に質問に答えて下さり、感謝している。各々設立から今日まで主と

なって運営されてきた人だけにすべての経緯に明るく、今後ケース・スタディの対象として同劇場を取り上げる場合、大変助かることであろう。ただしスタジオ高針は、いままではテアトル西友として映画劇場に模様替えされている。

最後に鳴海の誓願寺は、住職に話を伺ったが、演劇の公演はほとんどなく演劇空間としての本堂という興味ある視点は私たちも展開の余地がいまのところない。

なお、最後に名古屋芸術創造センターは、粟倉、酒井、安藤の3人で劇場の管理担当の職員にインタビューをした。

#### <調査へのコメント>

私が受け持ったのはわずか10件の調査であるが、劇場の種類は千差万別と言える。それは調査に先立ち私たち三人がそれぞれ様々な劇場に当たるように配分した結果でもある。

さて劇場の経営形態から分類してみると、以下ようになる。

- (1) 愛知県や名古屋市など公的機関に所属する劇場：愛知文化講堂、愛知勤労会館ホール
- (2) 宗教学法人に所属する劇場：誓願寺、東別院青少年会館ホール
- (3) デパート、スーパーなど劇場経営を第一義的に行っているわけではない民間商業資本に所属する付設貸しホール：テアトル高針
- (4) 民間の専門貸しホール：7ツ寺共同スタジオ
- (5) 劇団の付属劇場：スタジオ座・ウイークエンド、PH-7アトリエ、平針小劇場

1. 公的機関か民間機関かという視点に立てば、(1)と残りの(2)－(5)の二つになる。しかしその区別をもとにした統計なり数値を使って都市において劇場が持ちうる文化機能を解明しようとして得るものは多くない。ただ時間軸を立てて考察すれば行政側の文化政策が見えて来ることはあるであろう。

例えば戦後の歩みに限って言えば、戦後の復興と共に昭和30年から40年にかけて公的機関が多くの劇場ホールを建てており、愛知文化講堂や愛知勤労会館ホールの建設が示すように、名古屋もその典型的ケースに入っていることがわかる。(それどころかリーダー的存在であったようにも考えられる。)そして愛知文化講堂建設の経過を戦後史の中で考えてみれば、行政側が文化国家建設のシンボリックな可視的物体を求めた一つの結果として立ち現れて来る。一過性の出来事であったが、巨大な可視的物体の登場という点を考えると、1964年東京オリンピックや1970年大阪万国博覧会がその線上に存在することも見えるように思える。

これに対して愛知勤労会館は戦後の労働運動の一つの成果として基本的人権を物理的に保証するために生まれたことも見えて来る。労働運動や市民運動が公的機関の施設にどれだけ反映しているかによって都市での劇場の文化機能も変わって来る。勤労会館からスタートして各区立ホールや社会教育センターの建設の経過やその実態調査はケース・オブ・名古屋を語ってくれるであろう。

公的機関に対して民間機関としての劇場は名古屋位の都市人口を抱えるとかかなりな数になる。名古屋の場合、劇場数は民間優位にある。宗教団体が演劇ホールを所有し、百貨店資本が付属施設として所有する余裕を持ち、劇団が独立した劇場を所有し、個人の小屋主の劇場が存在しているので

あるから、基本的には豊かな都市というべきである。全国的に見て、5本の指に入るだけの立派さであろう。具体的に統計を比較できればこの推測が裏付けられるであろうし、時間軸をとってさらに比較すれば名古屋という都市が東京の変容とどんな関係にあるかもわかるであろう。

2. 民間資本の経営形態を非営利か営利かで分けると、宗教法人は税金が課せられないので、(2)とその他(3)―(5)という分類になる。しかし東別院青少年会館ホールは宗教活動だけに使うのではなく、入場料を徴収する劇公演を行っているのが実情であり、その限りで営利活動だから当然税金も納付している。

営利か非営利かはあまり有効な区別にならない。むしろ、宗教法人にとって興行とは何であるのか。その活動は知られているが、宗教団体自らが行う演劇的な祭典ではなく、いわば外の団体の活動としての演劇公演を引き受けること（それは薪能から始まってアマチュア演劇集団への小屋貸し、商業劇団の公演を買い取って行う興行など、いろいろなケースがあるが）の意味はなにか。

百貨店の場合、星ヶ丘の三越が映画館を持っているが、デパートの付属劇場という形態は、民間資本が劇場を持つ一つの典型的ケースであろう。高針の西友もそうであった。今では映画館に模様替えされてしまったが、その前は私の調査にあるように、劇場空間を持っていた。主たる活動が商業、あるいは商品販売であり、その企業戦略として興行が利用されているのが実情である。営利であると言っても自己目的のホールではない。少なくとも名古屋にあってはその域を出ないことは、劇場空間としての「テアトル西友」閉鎖がそれを物語っている。あくまで観客が商品の購入者になることを主眼に置く以上、観客の動員は演劇によらなくてもよい。映画の方が効率的ならばそちらを選ぶであろう。同じ論理から、八場町に出来る「パルコ」は、劇場ホールを作らなかった。しかし伝えられるところによると、市場調査を行っても効果的な動員が出来ないと言う判断であった。つまり名古屋にあっては、東京の西武や東急のせぞん劇場や文化村を存在させるだけの階層がないということの意味しており、意味深い事実と言わねばならない。今後の調査で、名鉄ホールや中日劇場のケースを検討したい。また今回の調査に入っている電気文化会館や今池のガスビルのホールのケースは今後分析する必要があるであろう。つまり「パルコ」と違って市場性を度外視して新たに建設したことになるからだ。一体民間資本の付属施設としての劇場とは、何のためにあるのか。従来、百貨店に限られていたものが、なぜ電力資本や、ガス会社が作るようになったのか。今後の検討課題であろう。

自らの劇団を持たず、演劇公演だけを目的にし、また自立した経営をもつ民間専門劇場は、名古屋にあってはきわめて少ない。最大大手の御園座を除けば、自由舞台鶴舞座、七つ寺共同スタジオ、大曾根の鈴蘭南座、などである。私が調査できたのは七つ寺だけであるが、小屋主の二村氏という特異な存在によって支えられている個人経営の劇場である。営利を目的とせず、自ら演劇をしない人が劇場を作ると言うことは早い話が無償の行為であった。またディレタントが作る仲間内の音楽サロンの類ではないのであるから、それは運動というべき行為であった。そうした劇場の存在は、他の都市ではどのように発生しているのか。そうした調査も行い、日本の社会、とりわけ都市での存在意味を分析したいと私達は考えている。

他方、60年代に急速に消えて行った昔からの芝居小屋は、都市では跡形もなくなっていることが多いが、戦後世界での変遷を追ってみたいと考えている。地域研究としては、名古屋にあって鈴蘭南座が典型的存在としてどうか残っているが、戦後消えてしまった劇場は他にあるのか。それはなに故だったのか。消えた原因、そしてその結果を分析してみたいと考えている。

3. (1)と(2)は多くの場合、時間軸を中心に考察する研究とっていいが、当然ながら空間的に考える視点がある。それは劇場の存在する場所のもつ意味の研究、またその場所と劇場の関係の研究になる。

(1)に関与するが、都市によっては公的施設としての劇場ホールしか存在しないのであるから、全国平均で統計的にどのレベルの人口に達したら民間資本の劇場が存在するのか調査しても面白いであろう。もちろん、人口との関係だけでは統計としては深みがないので、劇団数、演劇鑑賞団体数とその会員数との比例関係が必要である。それは単に民間資本の劇場の存在要件を割り出すだけでなく、日本の文化圏の存在を教える（あるいは確認する）であろうし、時間軸をとって統計を行えば、戦後日本の文化史を語ることにもなるであろう。

さて私たちの地域研究としては、今後（演劇の分野に限って）名古屋を中心とする文化圏があるとするれば、というのもその実態は今後明らかにすることで当面は仮定に留まっているからであるが、その範囲に広まる劇場の網がどのように組まれているか調査したい。名古屋の持つ機能、また衛星都市での演劇の力、さらには産業的には衛星都市であっても演劇文化的には名古屋を意識していない都市があるかも知れない。それはなぜなのか。

話を名古屋の内部に限って分析することも課題である。どこに劇場はあるのか。その場所は名古屋という都市ではどんな意味を持っているのか。その意味と劇場の存在との関係は何か。大須という地域と七ツ寺スタジオは小屋主にとっては特別な意味がある。偶然に選ばれた場所ではないのである。また大曾根と鈴蘭南座も興味あることを語ってくれるであろう。また平針小劇場は、いま地下鉄鶴舞線の「平針」駅近くあるが、かつては劇団員が旗揚げした南区にあった。地元の住民との結びつきが強い劇団であった「名芸」は、本拠地を天白区の新興繁華街に移してきた事情は色々あるが、地元との心理的にも距離的にも近かった結びつきを弱める結果となっている。戦後の「歌声よおこれ」の機運の中、全国に広まった職場演劇の波の中から生まれ育ったこの長い歴史を持つ劇団はおそらく変わりつつある。劇場の場所はそれだけの影響力を持つように思われる。劇団「うりんこ」の本拠地が名東区に選ばれた経緯は私には不明だが、その環境を考えて選ばれたであろう。都市の住分けがその背後にあるであろう。

このように各劇場を地域の中に位置づけ、さらに全体的に眺めると、劇場空間がどんな場所に求められか解ってくる。それは単純に人が集まってくる大繁華街だということではなく、例えば大手商業劇場に対抗するようないわばサブカルチャーを意識的に作る都市自身の論理が見えてくる。そしてそれはサブカルチャー、あるいは対抗文化として自覚されるけれど、実はカルチャーの補完的意味しか持たないのかもしれない。それを確かめるにはどの様な劇団がどの様な観客を持ち、どこまでの力をもって存在しているかがわからねばならない。今後の研究課題となる。

4. 私は今回の一連の調査を通して社会学的な研究をしているが社会学者ではない。最終的には演劇や音楽活動を、つまりは芸術的パフォーマンスをどうすれば芸術性の高いものにすることが出来るかを求める研究者である。その視点から当然、どのような劇場が演劇に望ましいかを考える。劇場内部の舞台空間の形態や客席の形態が問題となる。また音響工学的な問題もある。調査はまだ中間段階であり、あくまで個人的なコメントの段階であるので多くを語れないが、一つの見解として一段と高い舞台とそれに面して階段状に広がる観客席、プロセニウムアーチがあり、いわゆる第四の壁がある劇場という箱への反省があったことは新しい劇場が示している。その代表格は名古屋芸術創造センターである。舞台は天井も高く、奥行きもある。張り出し舞台やエプロンも大きく取ることができ、広場を取り込んだとも言えるかもしれない。

音響工学的にも反省があり、大がかりな反響板を操作できる施設を持ってもいる。照明は著しく改善され、それに留まらず照明家の社会的認知が行なわれるほど認識が深まり、照明自身が芸術分野として自立して活躍できるほどの施設が施されるようになった。それは演劇の幅を広げたことはまちがいない。大手の劇場はどこも改装や改善を重ねたことが今回の調査だけでもわかる。

さて最後に劇場側はそうした舞台や設備を有効に使う演劇を求めている。劇場はいわばハードである。それには相当な資本投下が行なわれた。しかしソフト面では誰が資本を投下するのか。それが足りないのが現在の状況である。名古屋に演劇が花開くにはソフトへの配慮が必要である。

## 2

調査者：栗倉宏子

調査劇場：愛知厚生年金会館ホール

長円寺会館：ホール「サンギータ」

中電ホール

電気文化会館コンサートホール

今池ガスホール

名古屋市民会館

スタジオ・ルンデ

調査年：1988年

調査方法：直接インタビューによる情報収集並びに関連資料の収集

<調査へのコメント>

今年度の調査対象としたホールには3つの特徴あるタイプが見出だされる。A. 文化活動の結付きのあるホール、B. 特に音響設計に力を入れたコンサート専門ホール、C. 多目的ホール（公的機関が多い）、である。以下に、それぞれのタイプに属するホールの中からいくつかを取上げ、順次簡単にふれてゆきたい。

A. 文化活動に結付きのあるホールとしては〔006〕長円寺会館：ホール「サンギータ」、〔021〕スタ

ジオ・ルンデがあげられる。長円寺会館：ホール「サンギータ」では、“名古屋の地域文化活動の、コミュニケーションを含めた拠点を目指す”という姿勢がみられる。ホール「サンギータ」は最大150席の多目的小ホールであるが、特色ある自主企画及び演奏会の場として活用されている。企画によって会員制をとる（民族音楽の会）。コンサート休憩時間にはギャラリーでお茶のサービスがある。会館全体としては会議室もあり、貸しホール機能として、能管など伝統芸能を含む文化教室の会場としても使用されている。

他方スタジオ・ルンデは“クラシック・ファンが作った自作ホール”とでも呼ぶことができる。経営者の鈴木氏は、クラシック音楽の演奏家、音楽大学の教員でもあるが、氏がこのホールの建築およびコンサート企画の“創造主”である。1980年当時名古屋では、良い室内楽の演奏会も演奏会場も無いという不満から、自分で会場を作り、企画を立てることを考えつかれたという。個人会員制をとり、自主企画も貸しホールも全て会員のために運営される。会員は名古屋のみならず全国にひろがっており、海外在住者もいる。クラシックに限らず多様な、特色ある企画による例会コンサートが年に60回も実現されている。出演者は新人から海外の有名アーティストまで様々であるが、一流の演奏家による、講演を交えた演奏会という形が注目される。ホールは最大180席、アットホームな雰囲気を目指し、途中休憩時間にコーヒー他ドリンクのサービスがある。

B. 特に音響設計に力を入れたコンサート専門ホールとしては〔008〕電気文化会館コンサートホール、〔021〕スタジオ・ルンデがあげられる。電気文化会館ではコンサートホールの他にイベントホールがあり、演劇などの上演はそちらでおこなわれる。コンサートホールは、大阪（ザ・シンフォニーホール）、東京（サントリーホール）につぐ名古屋の本格的専門コンサートホールと目されている。最大座席数395、シューボックス型で、大理石製の客席側壁が可変式になっており、残響時間を調節できる。建築音響の設定に関しては設計時に、日本楽器製造建築音響研究室の協力を得ている。客席後部に、幼児連れの客のための親子室が設置されるなど、音楽を楽しむための細かい配慮がなされている。地元演奏家の利用に供することを見込んで建設されたという当初の予想と異なって、外国人を含む外来演奏家の利用も多いということもうなずける。

Aにもとりあげたスタジオ・ルンデのホールでは、所有者の鈴木氏により厳しく追及された建築音響が実現されている。氏は特に弦楽器の室内楽を念頭におかれ、「物理的に大きなエネルギーを持たない音楽のための専用ホール。心理的には、演奏者が聴衆を把握しきることができ、また聴衆は演奏者との一体感が十分得られる空間」を目指した。音としては、暖かく柔らか味のある音で、程良い分離・混合がおこなわれる響きが追及されている。

この他、このタイプに近いものとして、コンサート専門ホールではないが、音響設計に力が注がれているホールとして〔007〕中電ホールをあげておきたい。中電ホールは多目的ホールではあるが、昭和38年の建設時に、当時では珍しく建築音響に力をいれて設計されており、東北大学の二村教授他により指導を受けている。ホールの形状、仕上げ材料等の決定には音響的に1/20のモデル実験がおこなわれ、電氣的な残響付加装置を装備している。また現在、ホールを使用する演奏家は、ホール運営課の山腰氏による音響補正を受けることができる。

C. 多目的ホールとしては〔018〕名古屋市民会館ホールをあげておきたい。

名古屋市民会館は昭和47年オープンした大中2つの多目的ホールであるが、いずれのホールについても各種の設備が整っている。建築音響に関しても、建築時にはNHK総合技術研究所の協力を、昭和62年改修時には東京の永田穂建築音響設計事務所の協力を得るなど、力をいれている。

大・中両ホールとも、主たる運営としては貸しホールであるが、「自主文化事業」として、数多くの貴重な企画が実行されている。伝統芸能等を含むこれらの「自主文化事業」は、あまり一般には興行されていないような形や試みのものも多く、注目される。

名古屋では近年、地域の文化活動の振興あるいは地域での外来文化の消費が盛んになっているようである。その一つの現れとして、ホールの建設があるように思われる。今回調査した7ホールの中で、5ホールが1980年代に入ってオープンしたものである。残りの2ホールもホール改修あるいはホール付帯設備改装を1980年代に入って行っている。各ホールのオープン年をあげておくと次の通りである。

愛知厚生年金会館ホール	1980
長円寺会館：ホール「サンギータ」	1982
中電ホール	1963（1981ホール付帯設備改装）
電気文化会館コンサートホール	1986
今池ガスホール	1986
名古屋市民会館	1972（1987改修）
スタジオ・ルンデ	1981

今年度の調査に取上げていないホールにも、テレピアホールなど新設されているものもある。また特に音楽専門用のホールについては、県文化会館他新しいホールの建設が既に数件予定されているといわれる。名古屋の音楽ホールをめぐる文化は新しい時代を迎えつつあると言えよう。

### 3

調査者：酒井正志

調査劇場：愛知県中小企業センター

ふなきスタジオ

猪子石創造文化会館（うりんこ劇場）

名古屋港湾会館

名古屋市芸術創造センター（安藤氏・粟倉氏と三人で）

名古屋市公会堂

鈴蘭南座

滝創六ロイヤルマイム劇場

調査年：1988年



調査方法：直接インタビューを実施した。公的機関の場合のインフォーマントはその組織内の職員であるが、民間の劇場の場合、ふなきスタジオでは創設者の舟木淳氏、猪子石創造文化会館ではしかた氏と木村氏、鈴蘭南座では所有者の長野栄太郎氏、滝創六ロイヤルマイム劇場では創設者の滝創六氏から直接お話しを伺うことができた。公的機関の場合、インフォーマントが発足当時の事情をよく知らなかったり、その機関に着任したばかりで十分な説明を受けられなかったりしたが、それぞれの機関で、何らかの形の資料（利用統計表や設備概要や沿革誌など）を公刊している場合が多いので、それを利用して、詳細な数字などを知ることができた。民間の劇場の場合は、それぞれのインフォーマントから生の声を聞くことができた。

#### <調査へのコメント>

今年度、調査を実施した劇場は、まだ数が少ないので、全体的に論ずるのは今後の課題となるが、現段階で気付いたことを簡単に述べてみたい。

まず、当然のことではあるが、その劇場が公的機関であるか、民間の機関であるかによってその劇場の性格が大きく違ってくる。もう少し細かく、経営形態から分類してみると次のようになる。

#### I. 公的機関に付属する劇場

愛知県中小企業センター  
名古屋港湾会館  
名古屋市芸術創造センター  
名古屋市公会堂

#### II. 民間の機関

- 1) 専門の貸ホール …………… 鈴蘭南座
- 2) 劇団に付属している劇場 …………… 滝創六ロイヤルマイム劇場
- 3) 劇団に付属、あるいは深い関係を持ちながら、貸ホールとしても機能している劇場  
…………… ふなきスタジオ、猪子石創造文化会館

大手の民間劇場である御園座、中日劇場、名鉄ホールなどが未調査ではあるが、今回の調査では、公的機関のほうが設備・規模の点で、はるかに優れているといえる。何らかの財政的バックアップがないと、劇場の維持はかなり大変であることが伺われる。その点で、御園座、中日劇場、名鉄ホールがどのような経営を行っているのか、調査結果に関心が持たれる。

公的機関であれ、私的機関であれ、その劇場が独自のプリンシプルを持っているか否かによって、その劇場の性格がかなりはっきりしてくる。公的機関の中には純粋な貸ホールとしての機能しか果たしていない場合と、たとえば、名古屋市芸術創造センターのように、貸ホールとしての機能を果たしつつ、機関内に独自の委員会を設けて自主企画を行っている場合とがあり、後者のほうが、その劇場が、この地域において、どのような文化的な役割を果たそうとしているかが明確に見てとれる。公的機関が県や市などの自治体の文化政策しか実現しないという状態になるのは考えものであるが、名古屋市芸術創造センターの歴史を詳細に分析すると、興味深い結果が得られるかもしれない。さらに公的機関の場合、その劇場が建設された時の、名古屋あるいは日本全体の文化状況とのかかわりの中で、

考察してみる必要がある。

民間の機関として発足した劇場の中には、たとえば、猪子石創造文化会館のように、比較的しっかりした設備と組織を持っているところもあるが、今回の調査では、それはむしろ例外的であった。ただ、これらの比較的小さな劇場を調査して分ったことは、いずれの劇場でも、そこで演劇の創造にあたっている人々が、明確な意図と夢をもっているということであった。詳細はそれぞれの調査を見て頂ければ分かると思うが、それが、彼等がかかわっている劇場の舞台構造と深い関連があることを指摘しておきたい。大きな舞台を持ちたくとも持てないという現実的制約があることは十分に承知しているが、彼等は、いわゆる大劇場の大きな舞台を必要としているのではなく、自分たちの考えている演劇を実現できる「空間」を欲しているのだ。猪子石創造文化会館では、座席が可動式になっていて、場合によっては、座席を全部しまい込んで、「舞台」と「客席」とを同一平面にすることができる。ここでは、「舞台」と「客席」とが一体となった「演劇空間」の創造が考えられている。ふなきスタジオでも、一応客席が設けられてはいるが、客席を取り払い、劇場全体を同一平面にして、周囲を観客にかこまれて、その中で上演する、いわば「円形劇場」の構想を持っている。その為の照明の用意もほどこされている。ここで思い出されるのは、ピーター・ブルックの『カルメン』の演出であり、イギリスで夏に上演されるキリストの『受難劇』である。ピーター・ブルックは東京銀座のセゾン劇場の柿落しにオペラ『カルメン』をかけたが、完成したばかりの劇場の舞台を取り壊して、客席に張り出した形の円形舞台をつくり、闘牛場のアリーナに見たてて舞台を砂場とした。その円形の舞台をとりかこむように観客席をつくり、場合によっては、砂の舞台上に観客を座らせ、いわば観客の真只中に、演劇空間を創造してみせた。イギリスの受難劇では、客席は設けられておらず、観客たちが立ったまままたたずんでいるその場へ、役者たちが入り込んできて、演技を始める。観客は単なる見物人としてその眼前に繰り広げられる出来事を見るのではなく、劇の世界を役者たちと共有して生きることになる。これと同じような演劇空間を創造しようとする意気込みが、今回のいわば小さな劇場からは感じとることができた。

名古屋という都市空間の中で、演劇がいかなる文化的役割を果たしているかを知る上でも、また、演劇の理念をいかに実現させようとしているかを知る上でも、劇場の調査は十全に行われなくてはならないと思う。

中 京 大 学	発行 文化科学研究所事務局
<b>文化科学研究所会報</b>	住所 豊田市貝津町床立 101 中京大学社会学部内
No.3 1987. 6	TEL 0565-45-0971 (内線 377)

会報 No.3 をお届けします。今年度は3つの共同研究グループが活動を開始しております。この3つの共同研究の活動と、第1回の研究例会の資料が今回の会報の内容です。

研究所としての共通課題を形成していくうえで講演会と例会は重要な位置にあります。それらの企画から反省までのプロセスの中で、共通の課題や問題意識を醸成していく必要があります。今年度はそうした点に留意して、研究所の内実を豊かにしていただきたいと思っております。  
(事務局 小木曾)

### (1) 「演劇研究グループ」研究活動概要

#### 名古屋圏の劇場調査

安 藤 隆 之 (教養部)

酒 井 正 志 ( " )

粟 倉 宏 子 ( " )

#### [研究調査の概要]

この研究は名古屋文化圏の演劇運動の考察を目的とする。予定としては3ヶ年計画で、三段階にわたり調査研究を行う。第一段階として劇場の実態を調べ、第二段階として劇団の実態を調べる。第三段階では東京を中心とする劇団運動との関係で名古屋の演劇運動を考察し、単なる地域の劇場史、劇団史に留まらない都市論的アプローチを試みようとするものである。都市論的考察というのは、一つはフォークロアの研究がやはり名古屋及びその周辺を対象として進められており、それと対比して都市での演劇のもつ意味を問おうとするものである。また小劇場運動は名古屋でも70年前後から起きているが、その歴史的意味は何であったのか。それは消費社会の肥大化や都市機能の変化に関わっているのではないかと私達は考える。さらにこうした研究の終局段階として今後の演劇の持ちうる役割や可能性が(とりわけ名古屋で)見えてくれば幸いと考えている。

以上が安藤、酒井により当初考えられた研究プランの概要であるが、研究グループに粟倉が参加し、調査対象が音楽活動にまで広げられ、観点の再検討が必要となっている。演

劇はパフォーマンス・アートであるが、それは言うまでもなく音楽の演奏にも当てはまる。オペラやミュージカルなどは両者が重なり合う領域であり、両者が隣合わせの関係にあることは言うまでもないが、観客（聴衆）を一つの空間に集め、パフォーマンスと生きた空間を共有するという意味で同じ現象として考えてもいい。

私達は、研究領域を広げることと二つのものを視野に納めながら一つのを調査するのとは作業の困難さがまるで違うことを認識しつつ、パフォーマンス会場という視点で当面共に作業を進めることにした。

**具体的活動：** この研究は当初安藤、酒井の二名で1987年の4月から始められた。劇場調査が第一段階の研究テーマであるが、劇場とはたんに演劇上演会場というものではない。パフォーマンス会場と考えた方が正しい。そこで民族音楽を専門とする粟倉が参加した。三人で始めた作業はまず名古屋の演劇事情並びに音楽活動を大まかに掴むことである。私達は雑誌『テアトロ』などの定期出版物や参考文献を捜すことから開始し、今は劇場別、劇団別、労演や各種鑑賞団体、興業団体を網羅的にカード化する作業を進めている。

作業分担として、酒井が雑誌『テアトロ』をベースに1965年頃から名古屋での演劇上演作品と上演劇団のカード化をし、安藤がタウン誌『ナプガジャ』をベースに利用されている全劇場（屋外も含む）、活動中の全劇団をカード化している。更に朝日新聞、中日新聞、中日スポーツなどの新聞で情報を集め足りない部分のカバー作業も進めている。粟倉は最近10年間の名古屋の音楽活動と利用されている音楽会場をカード化する作業に入った。

劇場というものをパフォーマンス会場と捉えるならば、現在私達がカード化しているものだけでなく、都市の中の祝祭会場も含まれることになるが、私達の能力を考え今どこまで限定して調査するか検討している。演劇性、パフォーマンス性を持つサーカスやヌードシアターも対象となるだろうし、野球場や陸上競技場まで広がってしまうからだ。

他方秋に具体的に歩いて調査をする下準備として、2、3の劇団及び劇場の代表や経営者の話を聞き調査の方法やアンケートの形式を決めるところまで来ている。

以上が演劇研究グループの現状であるが、今後、私達としては狭い調査グループに留まらず、研究所外の研究者や演劇人を含む研究会を開きたいとも考えている。

中 京 大 学  
文化科学研究所会報  
No.5 1988.2

発行 文化科学研究所事務局

住所 豊田市貝津町床立 101 中京大学豊田学舎内

TEL 0565-45-0971 (内線 377)

1987年度の共同研究グループの研究活動の経過報告をお伝えします。まだ今年度は2月、3月と残っており特にこの時期が研究活動の時間にあてられることが多いため、成果の報告というわけにはまいりません。そういう事情を考慮いたしまして、今年度の研究成果は、来年度にこの会報とは別に簡易製本にしまして、お伝えすることになりました。是非ご覧ください。これからはこのような方式で成果を蓄積していくことになる予定です。

(事務局 小木曾)

(1) 「演劇研究グループ」中間報告

安 藤 隆 之 (教養部)

粟 倉 宏 子 ( " )

酒 井 正 志 ( " )

名古屋圏の劇場調査を始めて

「演劇研究グループ」は名古屋文化圏の演劇運動の考察を目的として、三年計画でその調査研究に入り、その一年目を終えようとしている。会報 No.3 に既に述べたように、われわれは、劇場及び音楽会場の実態調査、劇団及び楽団の実態調査、東京を中心とする演劇運動と名古屋の演劇運動との関連、という三段階の調査項目を設定し、初年度は主として劇場及び音楽会場の実態調査を行ってきた。

この調査を進めるだけでも、さまざまな問題がたちあられてきた。タウン誌『ナブガジャ』や各種の新聞、雑誌などをベースに、現在利用されている全劇場（公会堂、講堂、ホールなどを含む）をほぼカード化し終ったが、その数は、名古屋市内だけでも約50ヶ所、その他、名古屋近郊の都市における劇場が55ヶ所ほどにもなる。これに数ヶ所の屋外会場や演芸場が加わると、われわれの当初の予想を上回る数の「劇場」が名古屋及びその近郊にあることが分った。ここで一つの難問がでてきた。それは音楽会場である。演奏会

の場合は、もちろん、演劇と同じように、劇場・ホール・公会堂などを用いることが主であるが、時により、お寺の本堂や、教会の会堂、個人のサロンで行われることもあり、それまで含めると膨大な数にのぼる。名古屋での演劇と音楽の全体像を明らかにし、この地域において果たしている役割を考察しようとするれば、当然、これらの会場を無視することはできないであろう。この問題をいかに処理すべきかという課題をわれわれは抱え込んだ。

もう一つの問題は、現在利用されている劇場を明らかにするだけで果たして充分かという問題である。われわれの目的を達する為には、当然、歴史的パースペクティブが必要になる。そうすると、過去にどのような劇場があったかを調べ、その歴史的盛衰も取り上げねばならぬことになる。一つの劇場を調査する場合でも、単に、物理的な、会場の広さ、収容人数、設備を調査するだけでなく、その発足の由来から始まって、現在に至るまでの利用状況や劇団との関連も考察しなければならない。劇場が廃止された場合には、何故廃止されたか、その原因を探らねば充分とはいえない。

設定した一つ一つの項目がそれ自体非常に大きな研究対象であることが分っただけではない。それぞれの項目が分かち難く連関を持っていることが、調査を進めるにつれ、ますます明らかになってきた。とりわけ第一項目と第二項目とは非常に深いかかわりを持つと考えられるから、別個の項目として調査してもあまり意味がないともいえる。雑誌『シアトロ』や早大演劇博物館刊の『演劇年鑑』や各種新聞をベースに、劇団のリストアップとその上演作品のリストアップをほぼ終ったが、それによると、1965年から現在まで約200の劇団が存在する。それらの劇団がどの劇場を本拠にしているか、あるいは、いたかを調べあげてみるだけでも、ある一定の方向性が出てくるはずである。この二つの項目は、今後とも、同時平行的に考察を重ねる必要がある。

第三項目との関わりからいうと、東京や大阪をはじめ、他の地域から、何時、どのような劇団がやってきて、何を上演したかを明らかにせねばならないであろう。さらに、東京や大阪で上演された作品のうち、何を選択して名古屋で上演したかを明らかにすることによって、興味深い考察が可能と思われるが、その為には、東京・大阪あたりの演劇事情もつぶさに調べねばならなくなる。

その他にもいくつかの課題が見つかった。

- 1) 名古屋地域での上演作品目録を作成することにより、他の地域との比較対照が可能になるのではないか。それによって名古屋演劇の特色が立ちあらわれてはこないか。
- 2) 各種の演劇協会・音楽協会、演劇鑑賞会・音楽鑑賞会の実態を明らかにする必要

がありはしないか。

3) 歌舞伎、能、舞踊などどう取り組むか。

4) 高校演劇・大学演劇・職場演劇の果たしてきた役割を考察する必要があるか。

などなどである。

三つの項目を設定して調査を開始したものの、さまざまの課題が副産物として生まれてきた。われわれの調査研究は当初考えていたよりもかなり大規模なものにならざるを得ない状況にあり、初年度はその緒についたばかりの感がある。しかしこれまでこの種の調査研究がほとんど行われていない現状を考えると、われわれの仕事は非常に大きな意味を持ちうるといえよう。今後とも、抱え込んだ課題を一つ一つ解決しながら、調査研究を継続したいと考えている。

### 講演会の実施

調査研究を続ける一方で、名古屋の演劇事情に精通している方からお話を伺おうという計画が当初から立てられていた。人選の結果、第一回目として、名古屋NHK放送劇団の二期生で、昭和24年からラジオや演劇の仕事にかかわり、最近では、「中学生日記」や「銀河テレビドラマ」などテレビ出演もなさっている藤代健太郎氏に講師を依頼し、12月10日、八事学舎中会議室で実施した。コーヒーを飲みながら打ちとけた雰囲気の中で、演劇の現場に永年かかわってこられた氏から、外からはうかがい知ることのできない貴重な体験談を伺うことができた。名古屋演劇界に対する全体的視野に立った目配りという点では、やゝ物足りなかったが、具体的なエピソードを交えてのお話は、今後われわれが演劇やテレビドラマを見る際に大いに参考になることと思う。このような催しも今後とも継続し、われわれの演劇に対する目を広げていきたいと考えている。